

はぎ さわ

# 萩沢II遺跡

—平成4年度発掘調査報告書—

1993.3

岩手県宮古市教育委員会



宮古市埋蔵文化財調査報告書38  
A Report on the Archaeological Research in Miyako City, No.38

はぎ さわ  
萩 沢 II 遺 跡

—平成4年度発掘調査報告書—

1993.3

岩手県宮古市教育委員会

The Miyako Board of Education  
Miyako, Iwate, Japan



## 序 文

宮古市では400箇所以上もの遺跡が確認されております。遺跡の年代は1万年も昔の縄文時代のものから江戸時代に及んでおります。連綿と続く宮古の歴史の厚さを感じさせられると同時にそれらを後代に伝える責任の重さも痛感するところでもあります。

本遺跡が位置する崎山遺跡群は遺跡の宝庫としてつとに有名な所であり、また宮古市のなかでも開発事業が積極的に推進されている地域でもあります。それに伴い崎山地区では遺跡の調査も頻繁に行われておりますが、今回の発掘調査も宅地造成に先立って実施されたものであります。

崎山遺跡群は、おもに縄文時代の遺跡が多いことで知られておりますが、今回調査されたのは、炭窯をともなって出土した製鉄炉跡であります。宮古市ではこれまでも製鉄関連の遺跡はいくつか見つかっており、古代から製鉄に携わっていたことは確認されております。

今回萩沢II遺跡で出土した炉跡は、これまでに例のないタイプのものであります。遺跡の時代こそ特定できなかったものの、製鉄炉の構造、遺構の配置などを解明するうえで大変に貴重な資料であります。

この報告書が広く活用され、埋蔵文化財への理解に役立つことを願うものであります。

最後に、これまでの発掘調査、報告書作成に御協力を賜りました有限会社キクチ工務店をはじめ関係各位に感謝申し上げるとともに、今後の御指導、御協力をお願い申し上げます。

平成4年3月

宮古市教育委員会

教育長 佐藤 勇 逸

# 例 言

1. 本書は、平成4年度に実施した萩沢Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査の主体は、宮古市教育委員会（教育長 佐藤勇逸）で、発掘調査及び本書の執筆、編集は、阿部が担当し、高橋、鎌田、鶴田がこれを補佐した。
3. 調査座標は任意の座標である。
4. 高さは、標高値をそのまま使用した。
5. 土層観察に際しては、「新版標準土色帖」(1990)を参考とした。
6. 本文中の引用文献の略称は次の通りとした。(いずれも宮古市教育委員会刊行)  
「宮古市遺跡分布調査報告書1～4」武田将男 1983～86→「分布調査1～4」  
「宮古市遺跡分布図 昭和60年度版」武田将男 1986→「分布図86」
7. 出土した遺物、実測図、写真など調査にかかわる資料は、一括して宮古市教育委員会で保管している。

# 目 次

序 文	
例 言	
目 次	
I 調査経過	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査要旨	1
3. 調査体制	1
II 遺跡の位置と環境	2
1. 宮古市の地形概観	2
2. 宮古市の製鉄関連の遺跡	2
III 調査内容	11
1. 遺構の検出状況	11
2. 検出された遺構と遺物	12
IV 調査のまとめ	35
写真図版	

# 挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	3
第2図	宮古市の製鉄関連遺跡	4
第3図	地形分類図	5
第4図	遺跡周辺の地形	6
第5図	調査区全体図	7
第6図	遺構配置図	9
第7図	調査区土層断面図	10
第8図	第1号炉跡と周辺の遺構	12
第9図	第1号炉跡検出状況Ⅰ、Ⅱ	13
第10図	第1号炉跡検出状況Ⅲ(完掘時)	14
第11図	第1号炉跡土層断面	15
第12図	作業場跡	16
第13図	作業場床面焼土	18
第14図	第1号炉跡出土遺物(1)	19
第15図	第1号炉跡出土遺物(2)	20
第16図	第1号炉跡、作業場跡出土遺物(3)	21
第17図	作業場跡出土遺物(4)	22
第18図	第1号炭窯跡	23
第19図	第2号炭窯跡	24
第20図	第3号炭窯跡	25
第21図	第1号土壙跡	26
第22図	第2号土壙跡	27
第23図	遺構外出土遺物(1)	29
第24図	遺構外出土遺物(2)	30
第25図	遺構外出土遺物(3)	31
第26図	遺構外出土遺物(4)	32
第27図	遺構外出土遺物(5)	33



## 写真図版目次

- 第1図版 遺跡遠景、鉄滓、焼土等の出土状況
- 第2図版 作業場と第1号炉跡
- 第3図版 第1号炉跡炉床部出土状況
- 第4図版 第1号炉跡炉床部断面、第1号炉跡断面
- 第5図版 第1号炉跡断面
- 第6図版 第1号炉跡断面、鉄滓の出土状況
- 第7図版 調査区全景、作業場と第1号炉跡
- 第8図版 作業場と炉跡、第1号炭窯跡断面
- 第9図版 第1号炭窯跡土壇断面、第1号炭窯跡完掘状況
- 第10図版 第2号炭窯跡、調査作業風景
- 第11図版 出土遺物（羽口）
- 第12図版 出土遺物（羽口）
- 第13図版 出土遺物（鉄滓）
- 第14図版 出土遺物（羽口）
- 第15図版 出土遺物（土器）、出土遺物（石器）

## 付 表 目 次

- 第1表 鉄滓の分布と計測値……………34



# I 調査経過

## 1. 調査に至る経過

萩沢Ⅱ遺跡は、宮古市大字崎嶽ヶ崎第14地割字萩沢71-1に所在し、昭和57年度から昭和60年度にかけて宮古市教育委員会が実施した市内の遺跡分布調査事業により、宮古市遺跡コードLG14-2157として登録されている周知の遺跡である。

今回の調査は、本遺跡内における宅地造成（平成4年7月17日 菊地昭一により申請）によるものである。試掘調査は平成4年7月に実施され、その際に多量の遺物が出土するとともに遺構の存在が確認された。その後申請者と宮古市教育委員会との協議の結果、遺跡の記録保存を前提とした緊急発掘調査を実施するに至った。

本調査は平成4年8月6日から9月21日まで行われた。

## 2. 調査要旨

調査地 宮古市大字崎嶽ヶ崎第14地割字萩沢71-1

調査原因 宅地造成

調査期間 試掘調査 平成4年7月20日～平成4年7月25日

本調査 平成4年8月6日～平成4年9月21日

調査対象面積 約4,867㎡

調査面積 約1,200㎡

検出遺構 製鉄炉跡1基、炭焼窯跡3基、遺物包含層。

出土遺物 羽口、鉄滓ほか

## 3. 調査体制

発掘調査の体制は次のとおりである。

調査総括 岩田 善弘 宮古市教育委員会社会教育課長

山崎 吉章 " 社会教育係長

調査員 高橋憲太郎 " 社会教育係主任

鶴田 均 " 社会教育係主任

鎌田 祐二 " 社会教育係主事

阿部 豊 " 埋蔵文化財調査員（非常勤、主担当）

調査の実施にあたり、次ぎの各位から多大の御協力をいただいた。（敬称略）

〈地権者〉 菊地昭一

〈発掘調査〉 古館友三 吉田昭 前川友宏 佐伯裕則 北村忠治 佐々木茂美 刈屋昭三

今津東一 木村博 大越貞蔵 菅原テルミ 藤谷晶子 齋藤貞子

〈整理作業〉 永田美弥子 中村明子 久保田チエ

## II 遺跡の位置と環境

### 1. 宮古市の地形概観

岩手県は9割が山地、丘陵で占められ、県土の3分の2が北上山地である。北上山地は丘陵性の山地を連ね、東縁で太平洋に面している。宮古市は、岩手県の太平洋岸のほぼ中央に位置する。海岸線は、宮古市を境にして大きな変化を見せる。南部海岸はリアス式海岸として名高く、複雑に入り組んだ海岸線には大小の湾が形成され、多くの貝塚が分布する。北部海岸は海岸段丘が発達し、険しい景観を見せている。

宮古湾は、北東に向かって開けており、東を重茂半島、西から南にかけては北上山地に連なる小起伏地、丘陵地によって囲まれている。丘陵は標高100m前後であり、北から小本丘陵、千徳丘陵、八木沢丘陵、豊間根丘陵と続く。湾頭には丘陵を開析しながら大小の河川が流入しており、閉伊川、津軽石川が代表的な河川である。現在の市街地は両河川が形成した沖積地に立地する。

萩沢II遺跡は、市街地の北方で太平洋に三角形に張り出している小本丘陵に位置する。丘陵は、多くの小河川に侵食され、尾根が枝状に広がる複雑な形状を呈している。小本丘陵の西の館ヶ森(248m)から北東の女遊戸に向かって伸びる尾根があり、尾根の南東面は丘陵の中央部で比較的緩い斜面をなし、そのまま低湿地に続いている。当遺跡は、その南東に面した緩斜面上に位置し、遺跡の周辺では北と西から沢が流れ込んでいる。

### 2. 宮古市の製鉄関連遺跡

宮古市の製鉄関連遺跡は、これまで8カ所で確認されている。大半が未報告であることだけではなく、製鉄遺構には未詳の部分が多いこともあって、正確な遺構の性格付けが難しく、検出した遺構と遺物を紹介するにとどめたい。

細越I遺跡(田代地区)→平安時代の住居跡に伴って20基の炉跡が出土。鉄製品、羽口、などを伴う。鍛冶炉と思われる。

仏沢II遺跡(磯鶏地区)→下部構造をもつ炉跡が検出し、集落に伴っている。土師器が出土している。古代の鍛冶炉と思われる。

磯鶏館山遺跡(磯鶏地区)→空濠の埋土から炉跡が出土している。中世の鍛冶炉と思われる。

黒森町I遺跡(山口地区)→江戸時代中～末期の遺構、遺物に伴う鑄造炉跡出土している。

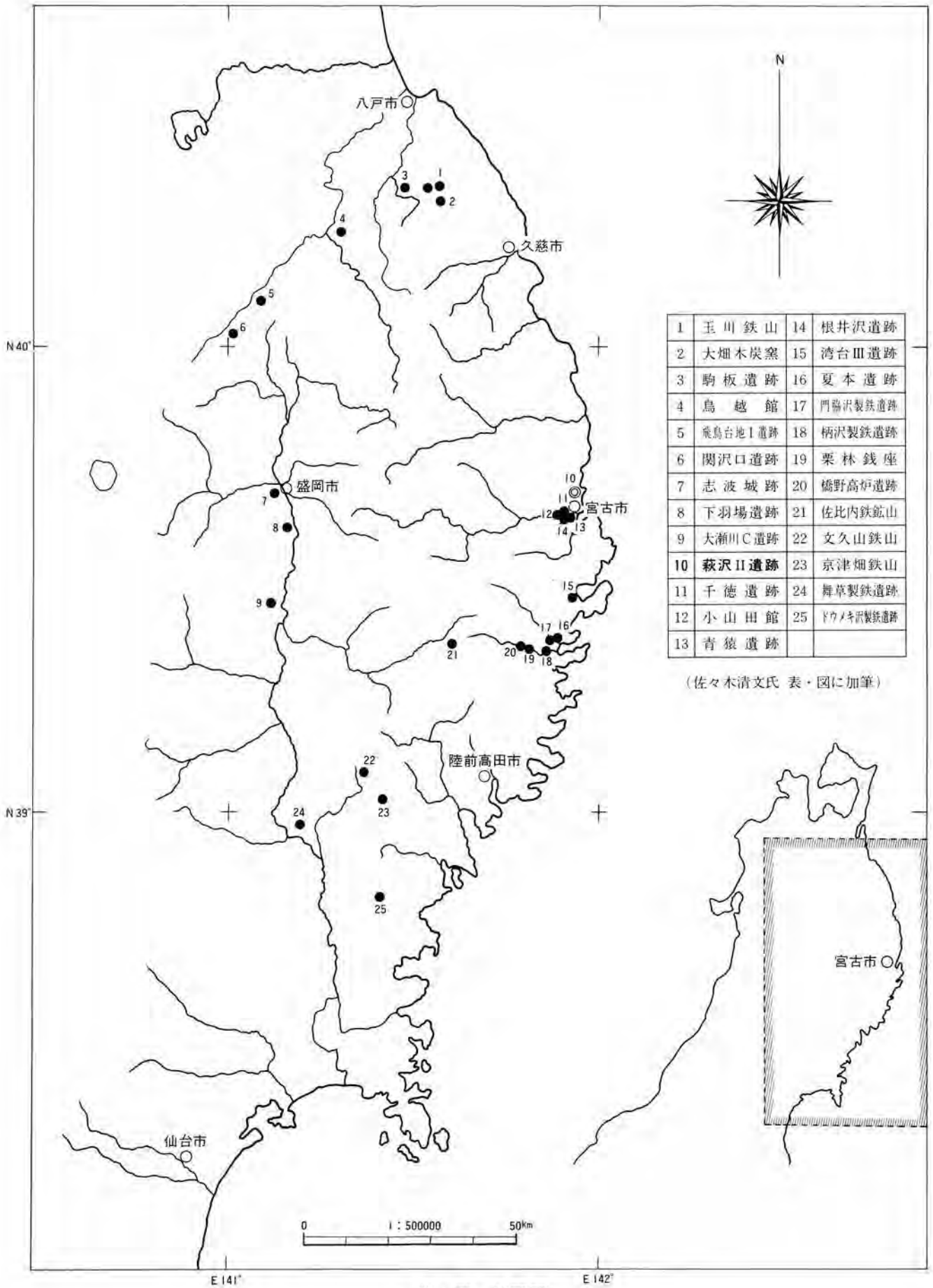
千徳遺跡(千徳地区)→鉄製品、羽口などを伴った炉跡を検出、中世の製鉄炉といわれる。

青猿I遺跡(近内地区)→斜面上で作業場を伴った炉跡が出土。土師器と大量の鉄滓が出土している。平安時代の製錬炉と思われる。

鯉沢遺跡(花輪地区)→急斜面を削平した平場から鍛冶炉が出土する。平安時代の住居跡に伴うものである。

根井沢I遺跡(津軽石地区)→方形と丸形の炉跡が出土。大量の鉄滓を伴うが、時期は不明である。

この他にも、例えば赤前遺跡群のように、炉跡は確認されていないが、鉄製品、羽口、鉄滓などが出土する遺跡も少なくない。



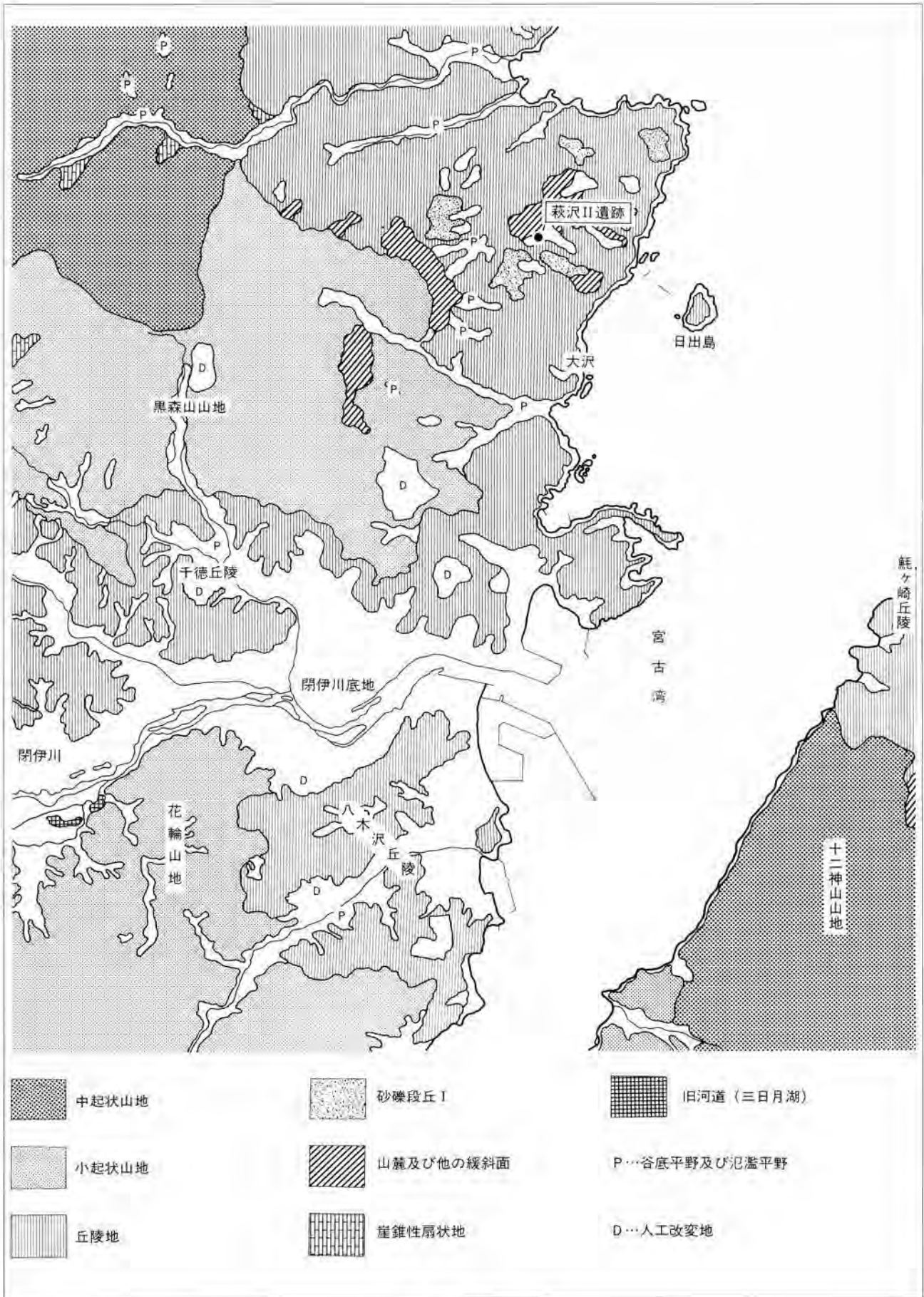
1	玉川鉄山	14	根井沢遺跡
2	大畑木炭窯	15	湾台Ⅲ遺跡
3	駒板遺跡	16	夏本遺跡
4	鳥越館	17	門脇沢製鉄遺跡
5	飛鳥台地Ⅰ遺跡	18	柄沢製鉄遺跡
6	関沢口遺跡	19	栗林銭座
7	志波城跡	20	橋野高炉遺跡
8	下羽場遺跡	21	佐比内鉄鉱山
9	大瀬川C遺跡	22	文久山鉄山
10	萩沢Ⅱ遺跡	23	京津畑鉄山
11	千徳遺跡	24	舞草製鉄遺跡
12	小山田館	25	ドクメキ沢製鉄遺跡
13	青猿遺跡		

(佐々木清文氏 表・図に加筆)

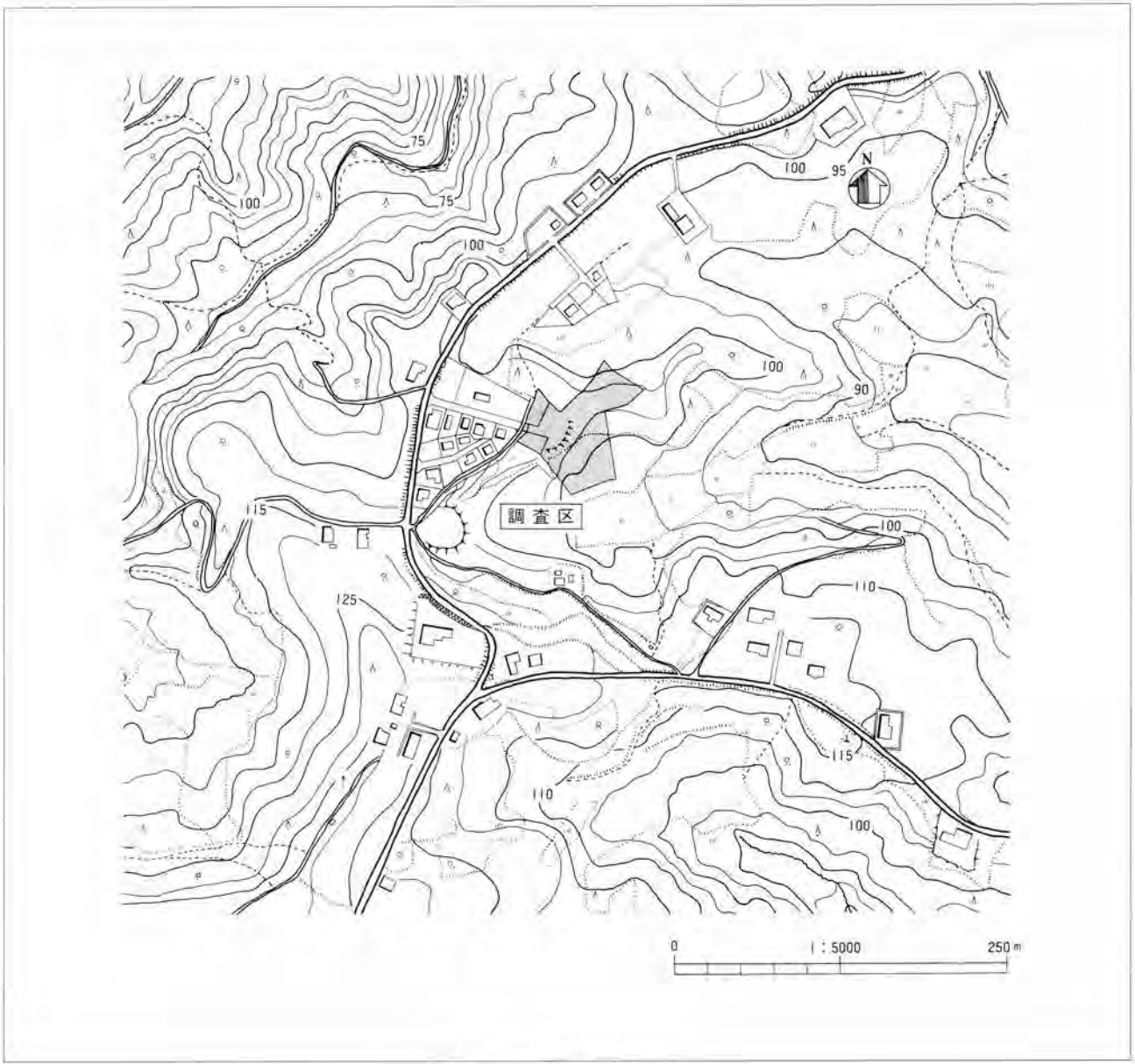
第1図 位置図



第2図 宮古市の製鉄関連遺跡

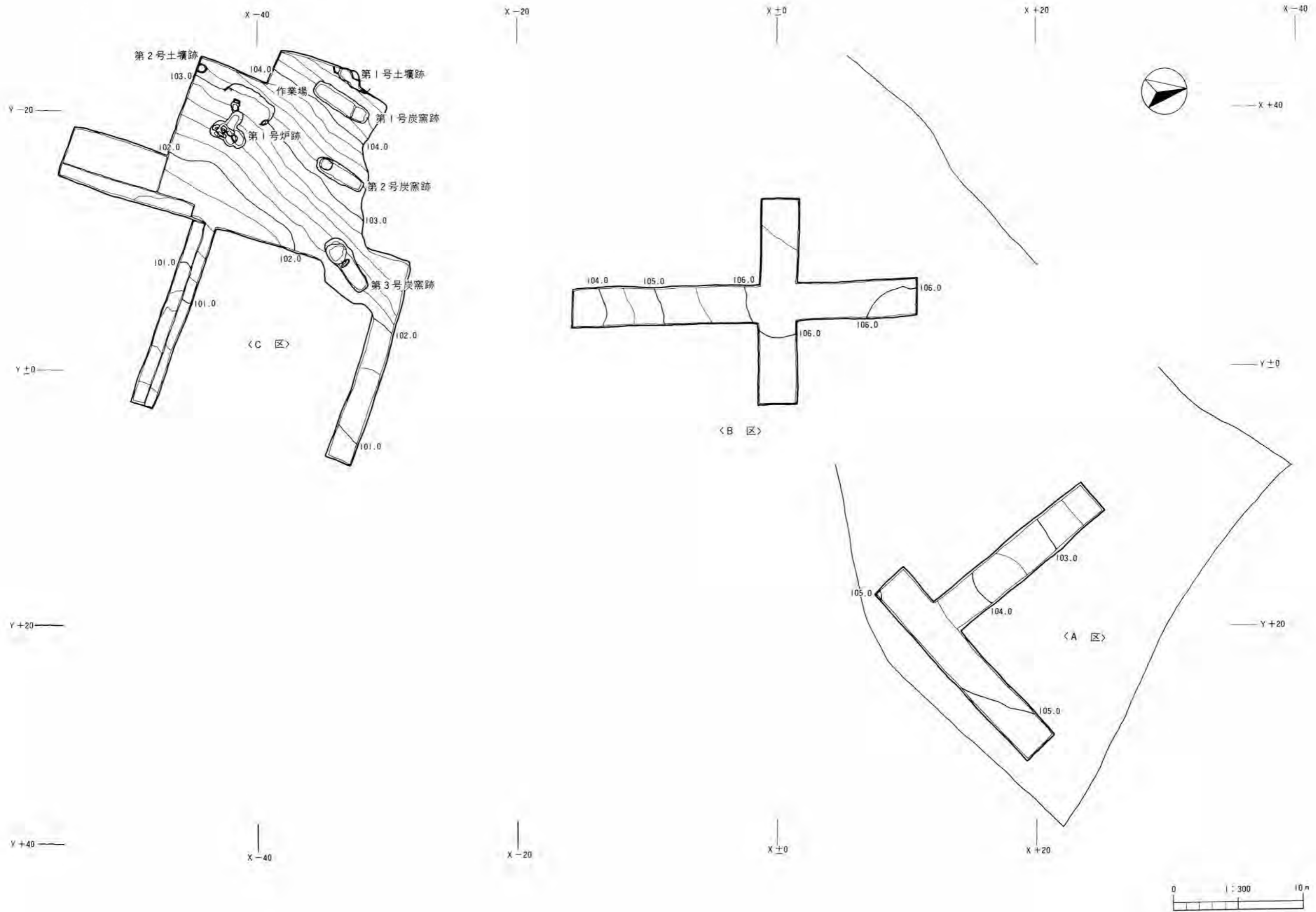


第3図 地形分類図



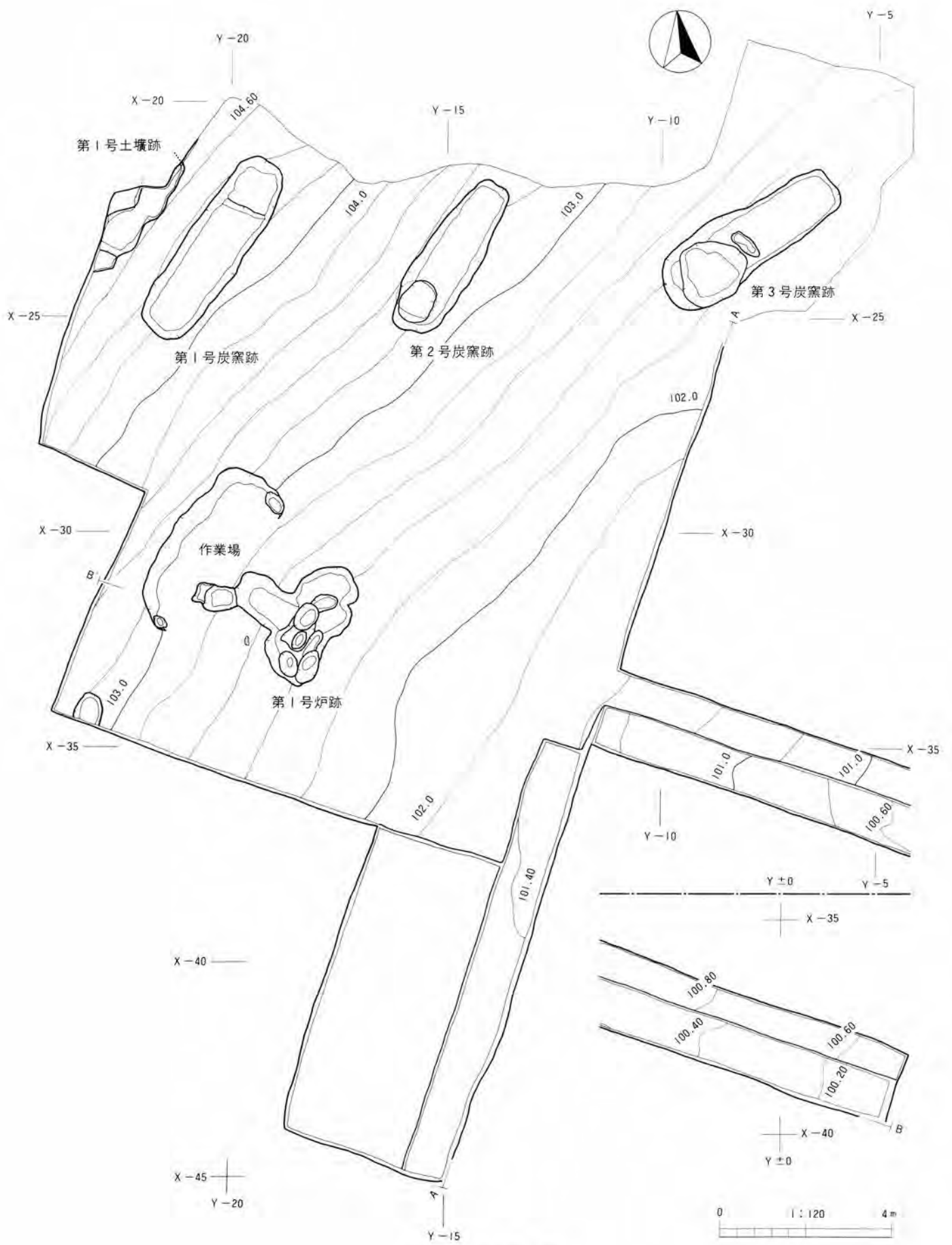
第4図 遺跡周辺の地形



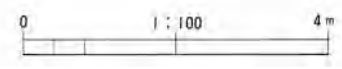
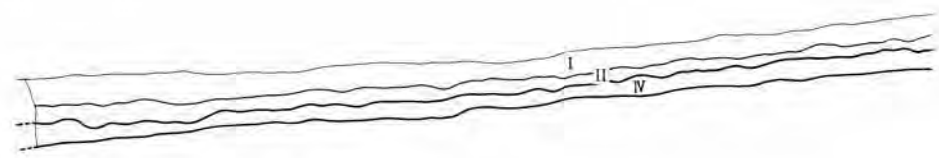
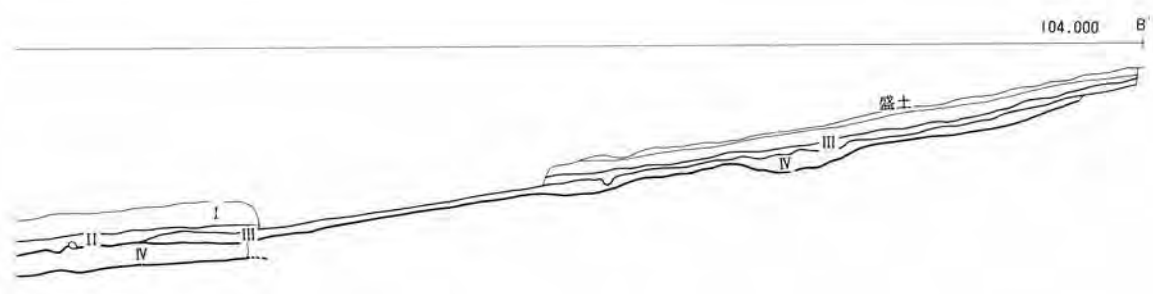
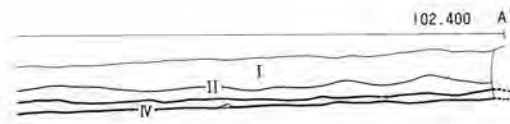
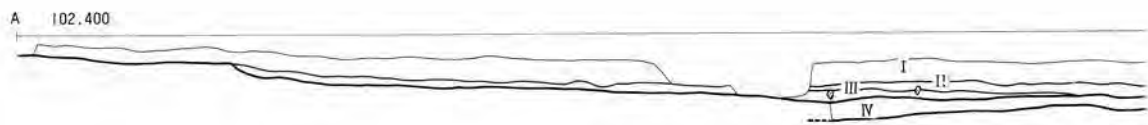


第5図 調査区全体図





第6図 遺構配置図



第7図 調査区土層断面図

### III 調査内容

#### 1. 遺構の検出状況

調査対象区域は東西にのびる尾根の稜線部で、北はやや急な斜面、南は緩斜面である。試掘に際して、稜線部、急斜面部、緩斜面部に調査区を設けた。調査区内は全面的に表土を取り除いて実施した。

稜線部、急斜面部では遺構は確認されず、遺物も数点の土器片と陶磁器片が検出されたのみである。緩斜面部では、大量の遺物が出土するとともに遺構の存在が確認された。本調査は、緩斜面部を中心に調査区を拡張して行った。

基本層序はⅠ層～Ⅴ層の5層に大別される。

Ⅰ層：表土。にぶい黄褐色土を基本土とし、大量の褐色土が混じる。少量の炭粒を含む。調査区全体に堆積する。

Ⅱ層：固めの暗褐色土を基本土とし、少量の鉄滓、陶磁器片を含む。南西部を中心に堆積する。

Ⅲ層：軟らかい黒褐色土を基本土とし、鉄滓、羽口片、焼土塊などを大量に含む。南緩斜面部で観察された層である。

Ⅳ層：Ⅲ層と同じく黒褐色土を基本土とする層であるが、遺物は土器片、石器などである。斜面中腹から南に堆積する。

Ⅴ層：安山岩の風化した地山層である。

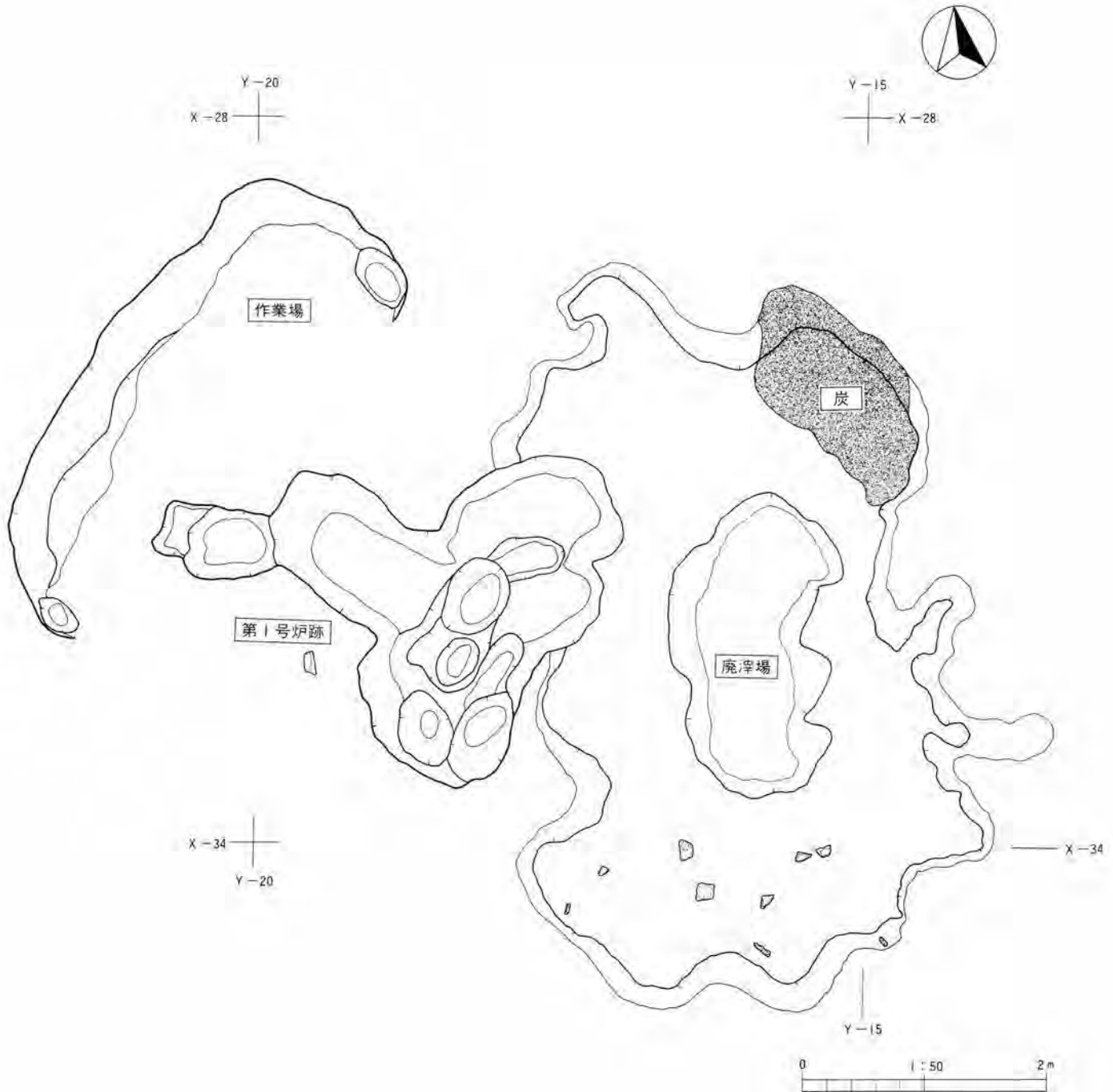
遺構検出面は、Ⅳ層である。

検出された遺構は、作業場を伴った炉跡1基、炭窯跡3基、溝状遺構1基、土壇跡1基である。検出面は、いずれもⅣ層上面である。作業場と炭窯は、いずれも等高線方向に沿って並び、炉跡は等高線に直交して掘り込まれている。遺構は、土壇跡を除き、いずれも製鉄関連の遺構であることは確認されたが、時代を裏付ける共伴遺物を欠き、時期は特定できなかった。遺構の配置などから同一時期のものと思われる。

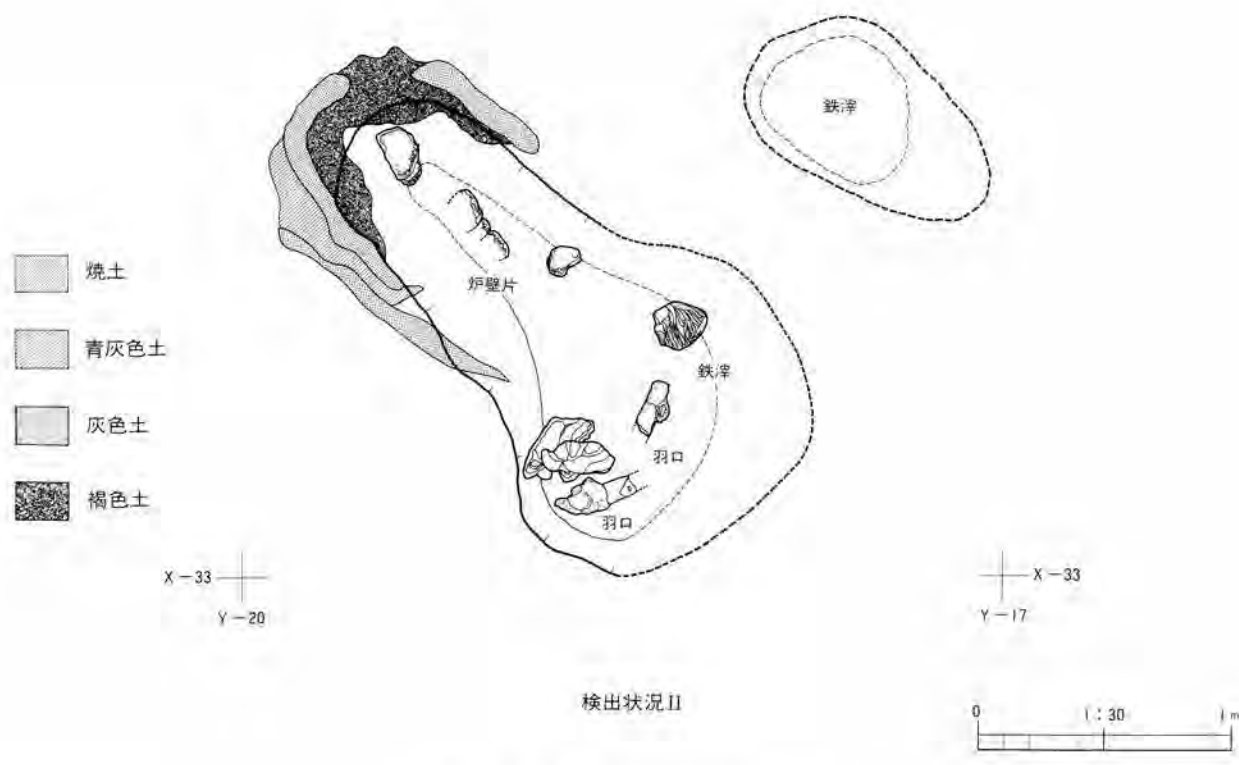
## 2. 検出された遺構と遺物

### 第1号炉跡（第8図～第11図）

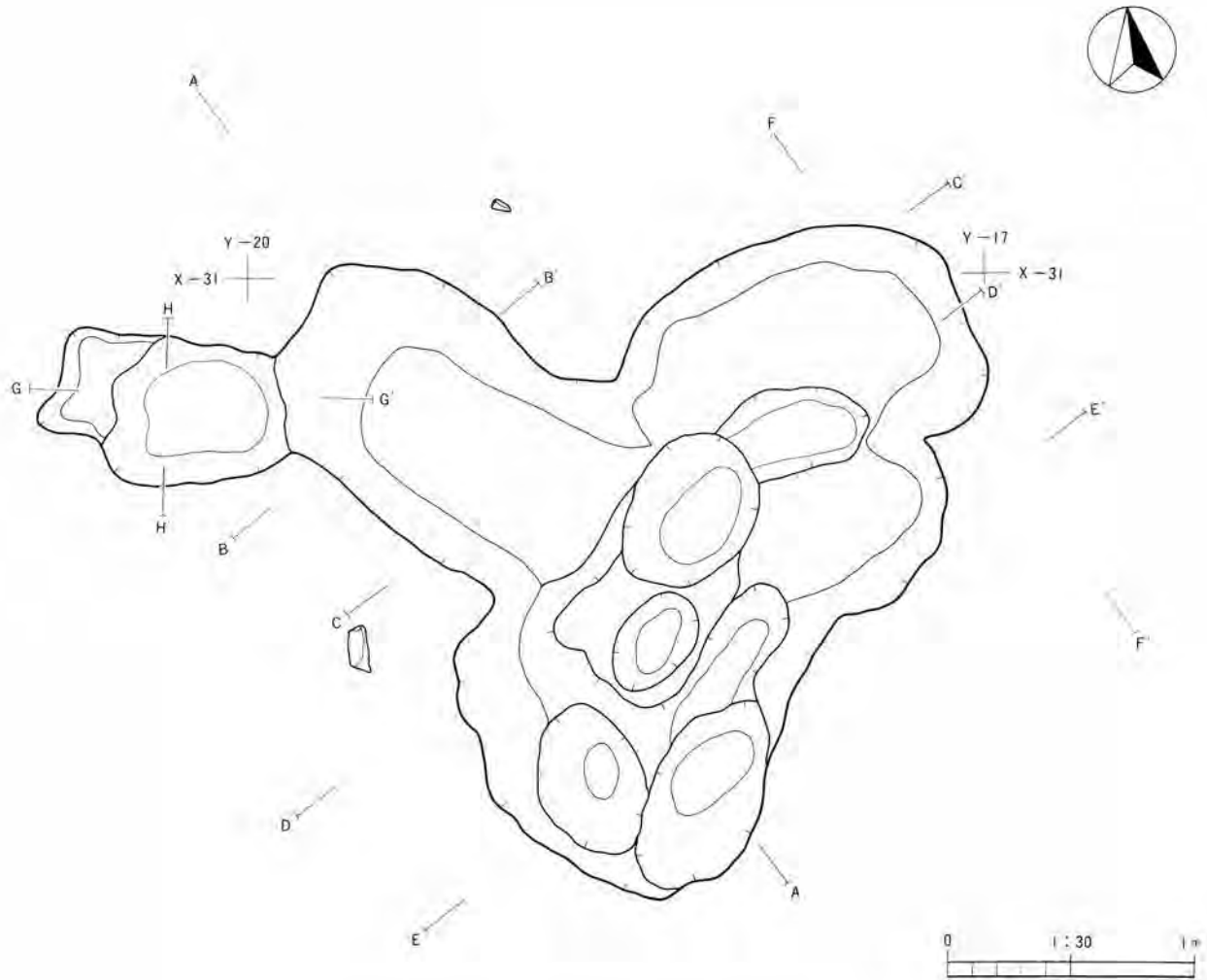
遺構はC区西の緩斜面の中腹に位置する。緩斜面に作業場、炉跡、廃滓場と縦方向に並ぶ。検出面は作業場、炉跡ともにIV層上面である。



第8図 第1号炉跡遺構配置図



第9図 第1号炉跡検出状況 I、II

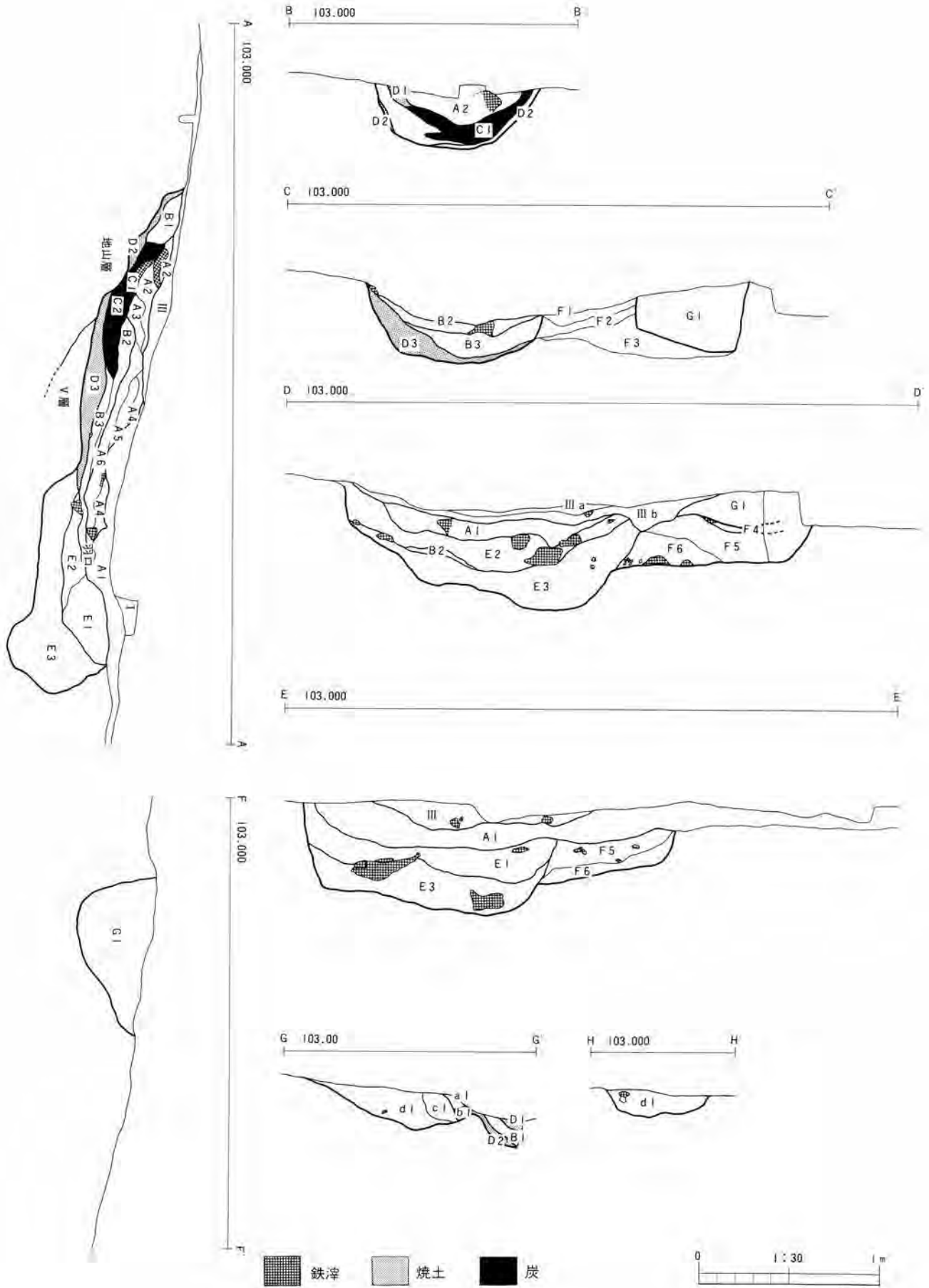


第10図 第1号炉跡検出状況Ⅲ（完掘時）

炉跡の平面形は、凸字形を呈し、縦方向と横方向の竪穴から形成されている。いずれも楕円形を呈する。当初焼土と灰色土が馬蹄形に並んだ形で出土した縦方向の竪穴は、炉の下部構造の遺存部分である。規模は、長さ約150cm、幅約90cm、深さは検出面から最深部で36cmを測り、床面はU字状に丁寧に掘り込まれている。炉の主軸方向は、N-51°-Wである。横方向の竪穴は、廃滓場として掘られたもので、規模は長さ290cm、幅150cm、深さは検出面から最深部で58cmを測り、床面は、凹凸が目立ち、掘り方も雑である。

埋土は、炉体の崩壊土層と構築土層に大別できる。崩壊土層は、焼土塊、炉壁片、羽口、鉄滓などを含む。構築土層は、上下の竪穴で明瞭な違いを見せる。上の竪穴は、炭、粘土、焼土の各層からなる炉の下部構造であるが、下の竪穴は、大量の鉄滓を含む土で埋められていた。





第11図 第1号炉跡土層断面

Y-23  
X-28

Y-18  
X-28

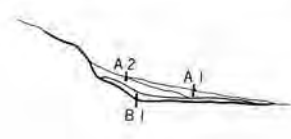
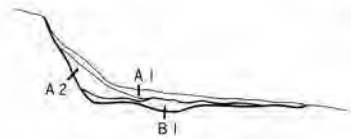


X-32  
Y-23

X-32  
Y-18

A 103.600 A

B 103.600 B

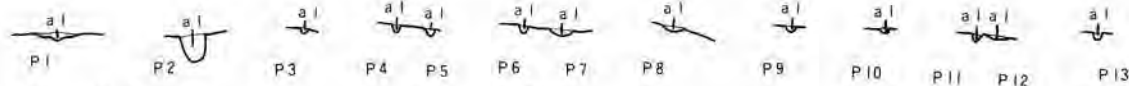


C 103.600 C

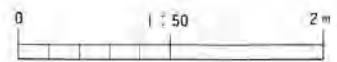
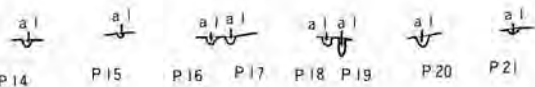
D 103.600 D



a 103.400 a    b b    c c    d d    e e    f f    g g    h h    i i    j j



k k    l l    m m    n n    o o    p p



第12図 作業場跡

A 1～A 6層は、炉の崩壊土層である。A 1層は、灰色土が多量に混じる灰赤土を基本土とするザラザラした土の層で、大量の焼土塊、粘土と共にスサ入りの炉壁片を多量に含む。A 2～A 6層は、暗赤褐色土を基本土とする軟らかめの層であるが、焼土や粘土の含み加減で細分される。

B層～E層が構築土層である。

B 1～B 3層は、固く締まりのある暗褐色土を基本土とする層で、上面で炉壁塊、流動滓、炭などが多量に検出されている。

C 1～C 3層は、炭塊を大量に含んだ炭層で、C 2層には固い灰白色土が混じる。

D 1、D 2層は、固く締まりのある赤褐色土層を基本土とし、少量の炭が混じる。

E 1～E 6層は、軟らかく締まりのない暗褐色土を基本土とし、多量の鉄滓、少量の粘土塊を含む。

第1号炉跡の西端で、浅い掘込みが検出している。平面形は不整形を呈し、西側に方形の浅い平場を持つ。規模は95cm×60cm、深さは最深部で、21cmを測る。

埋土は3層に大別される。A層は軟らかい暗褐色土を基本土とし、鉄滓、炭、焼土塊を少量含む。B層は軟らかい黒褐色土を基本土とし、炭を多く含む。C層は固い褐色土を基本土とし、焼土塊を多く含む。

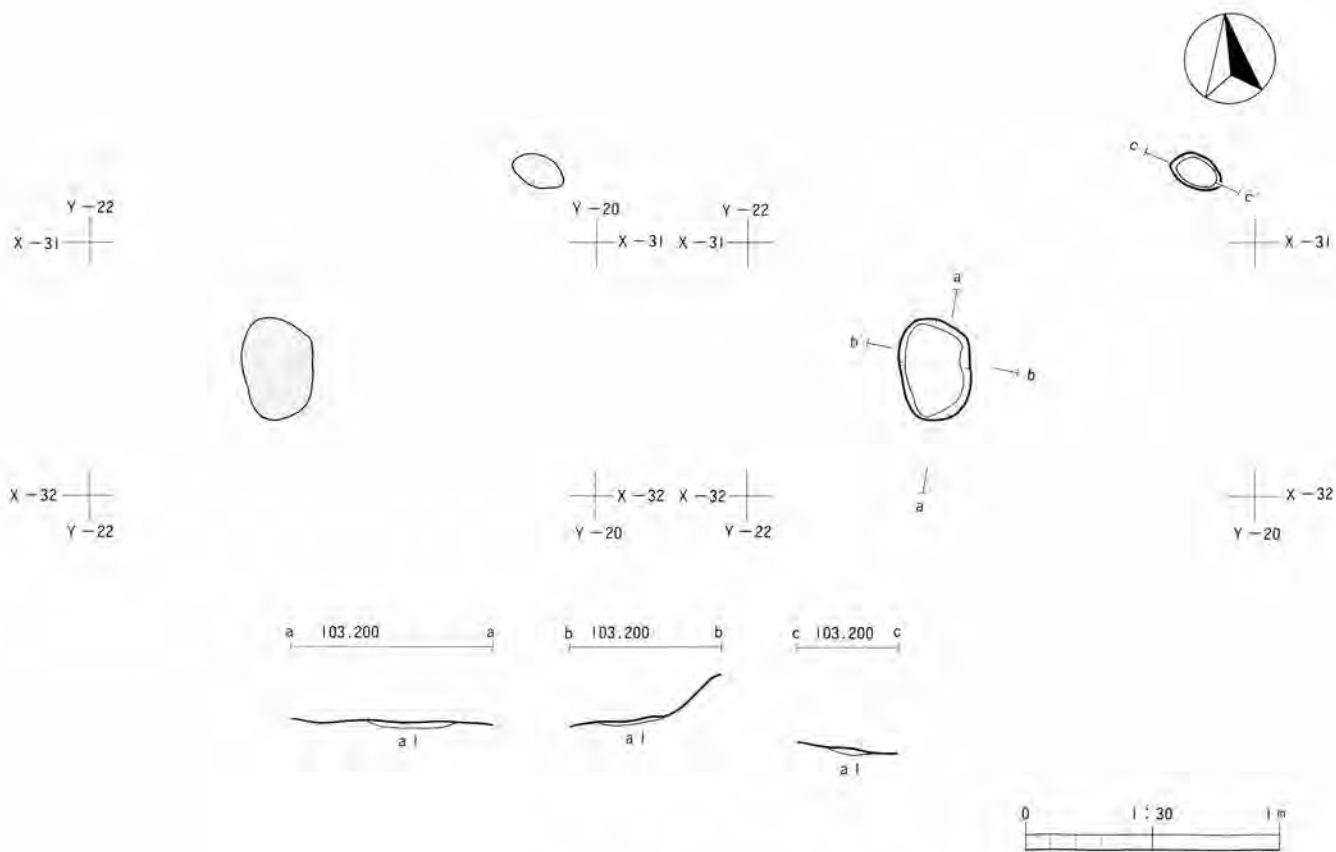
#### 遺物（第14図～第16図）

遺物は大きく分けて鉄滓と炉壁であり、主にA層から出土している。1～4は羽口である。1、3、4は先端部で、外面の斜線部は灰色に変色している部分を、内面の網点は黒色に変色している部分をそれぞれ示す。内径は、1が約3cm、2は楕円形を呈し2.8cm×3.3cmを測る。外面にヘラナデ調整痕をもつものもある（2、3）。胎土はいずれも橙～にぶい黄橙色で、細かい白い粒を少量含む。5は、出土した鉄滓のなかで最大の流動滓である。鉄滓については表1にまとめた。（34頁参照）

#### 作業場（第12図）

作業場は、炉跡のすぐ北に位置する。検出面はV層上面である。前述したように作業場の竪穴は、等高線に沿って掘り込まれ、平面形は隅丸方形を呈す。規模は、東西約420cm、南北約150cmを測る。壁は東側では外傾しながらまっすぐ立ち上がっているが、西側では傾斜も緩く、外湾する。床面は平坦であるが、炉に向かってやや傾斜をなしている。壁面、床面ともほぼ全面炭粒や炭粉で覆われていた。貼床が施されており、B 1層が貼床層である。B 1層は固く締まりのある明黄褐色土を基本土とし、少量の炭を含む。貼床の範囲は斜線で示した。

柱穴は竪穴の東西の端で検出されている。いずれも掘り方は浅く、柱当たりも確認されていない。また、炉の周辺部で小ピット群を検出したが、ほとんどのものが埋土に炭と焼土粒を含んでいた。



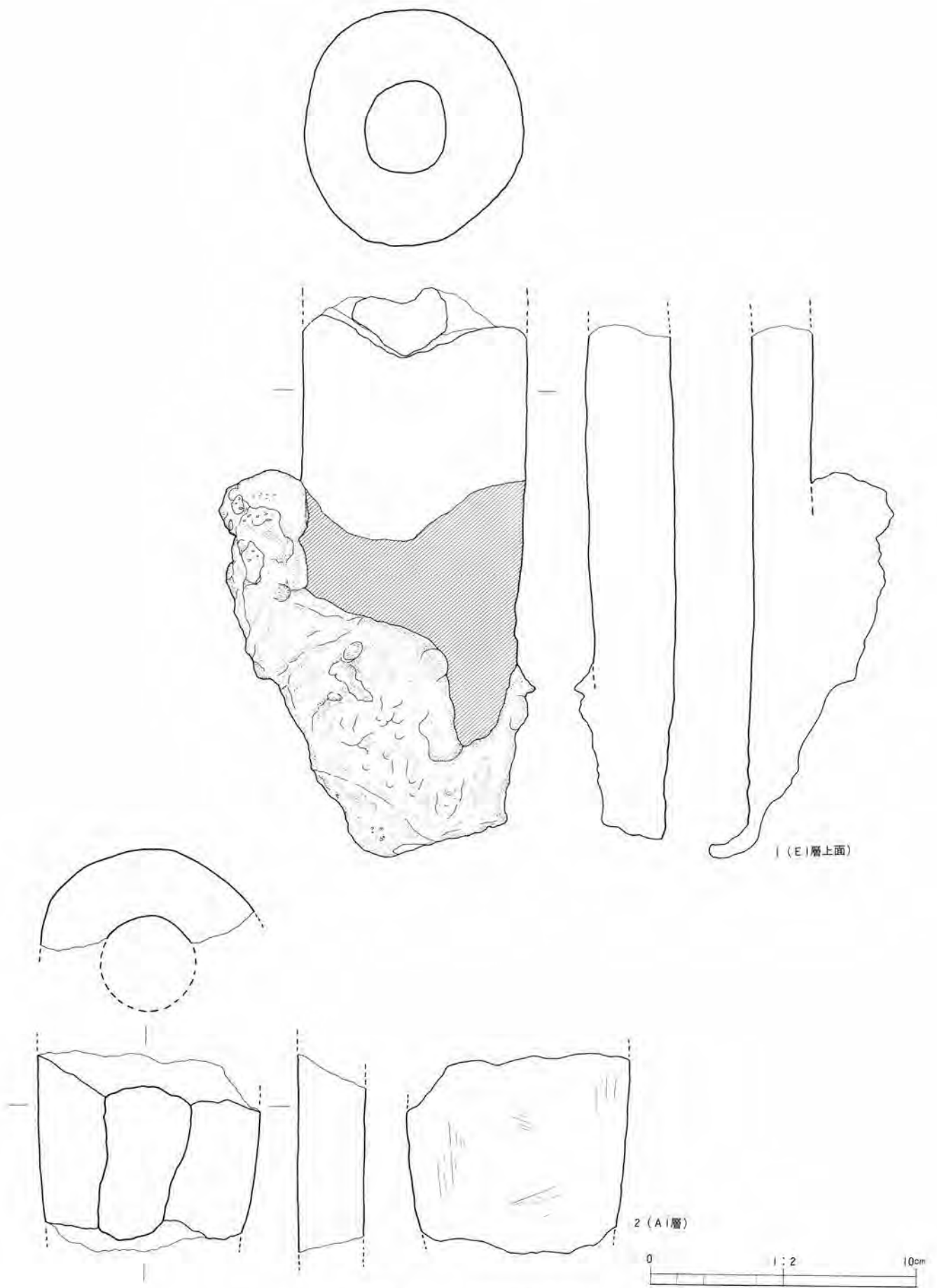
第13図 作業場床面焼土

**作業場床面の焼土** (第13図)

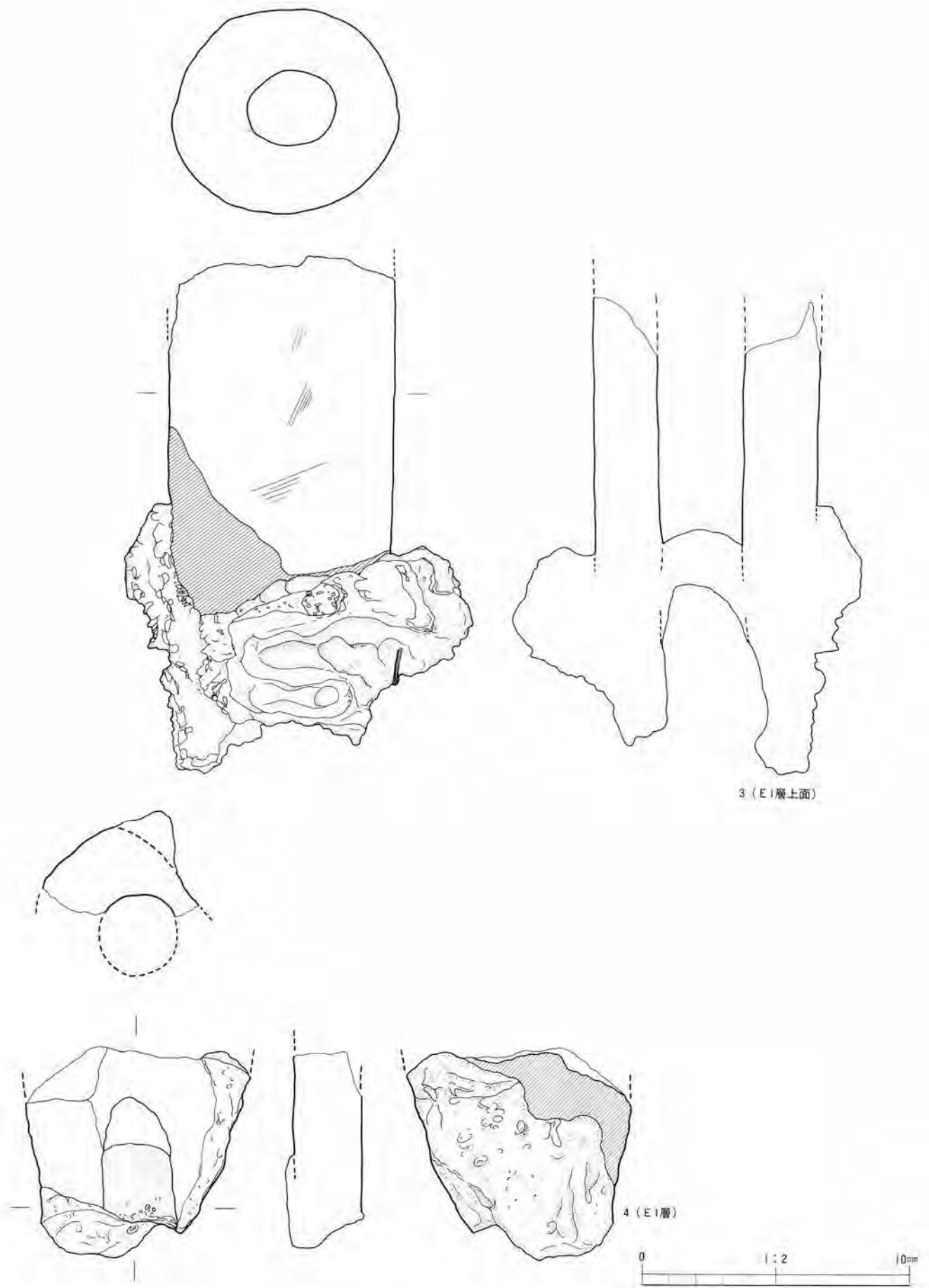
床面の西と中央の2ヵ所で焼土遺構を検出している。平面形はいずれも楕円形を呈し、規模は、西が40cm×30cm、中央が20cm×13cmを測る。またa1層はいずれも固い赤褐色土を基本土とし、少量の炭を含んだ層である。焼土層厚は1cmに満たなく、底面は焼成を受けていない。

**遺物** (第16図、第17図)

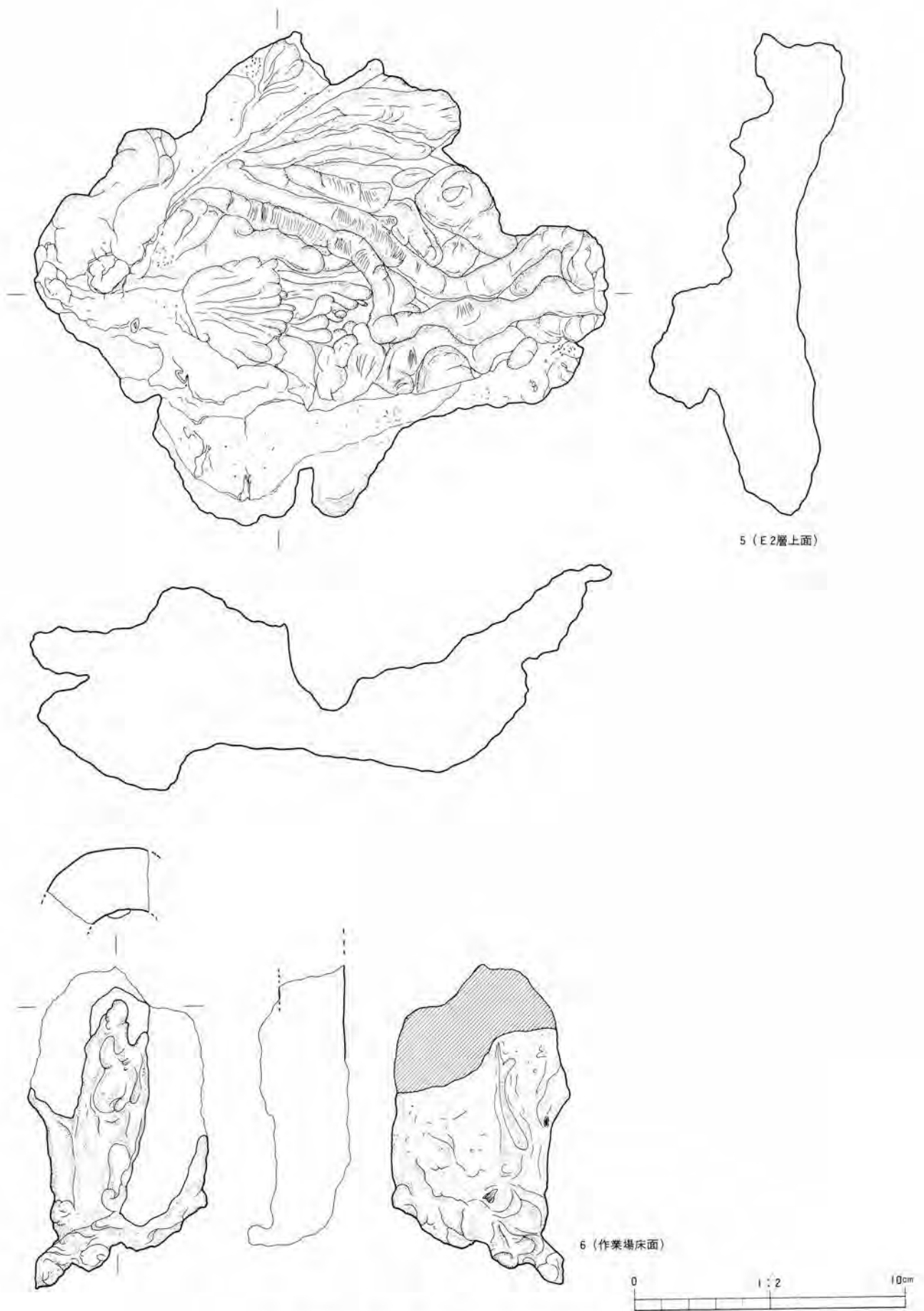
遺物は、羽口と鉄滓が出土している。6、7は羽口の破片で、床面の西端とA2層で検出している。7の貫通孔は楕円形を呈し、内径は3.8cm×3.5cmを測る。胎土はいずれも橙～黄橙で、細かい白い粒を含む。



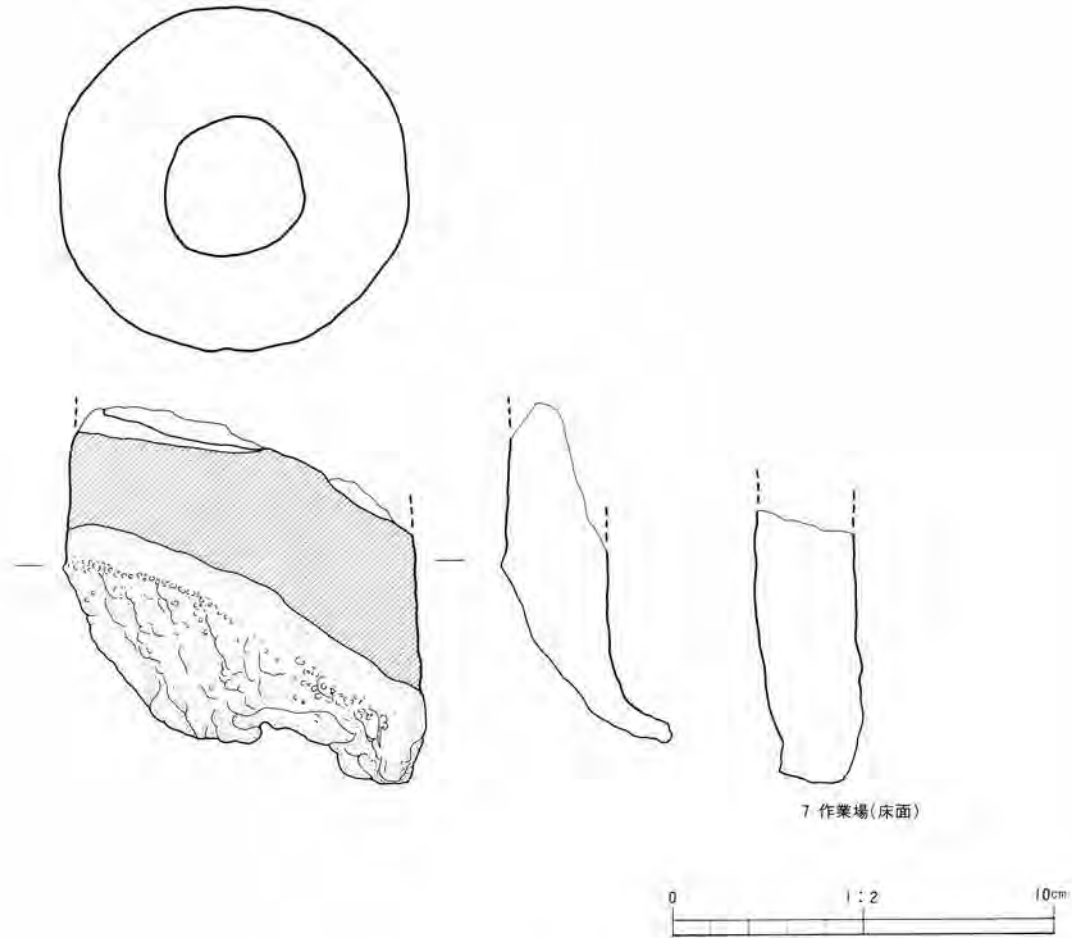
第14図 第1号炉跡出土遺物(1)



第15図 第1号炉跡出土遺物(2)



第16図 第1号炉跡、作業場跡出土遺物(3)



第17図 作業場跡出土遺物(4)

#### 第1号炭窯跡 (第18図)

第1号炭窯跡は、C区の北西部に位置する。平面形は隅丸の長方形を呈し、規模は、475cm×140cm、深さは45cmを測る。壁は外傾しながら直線的に立ち上がる。床面は平坦であるが、北の端が土壙状に大きく掘り込まれている。床面の片端が土壙状の掘り込まれているのは、3基の炭窯跡に共通する大きな特徴である。

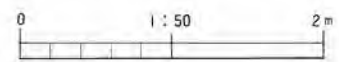
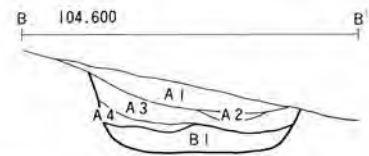
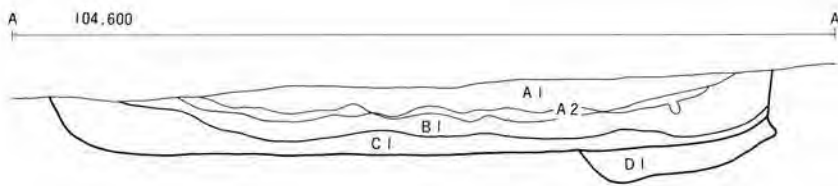
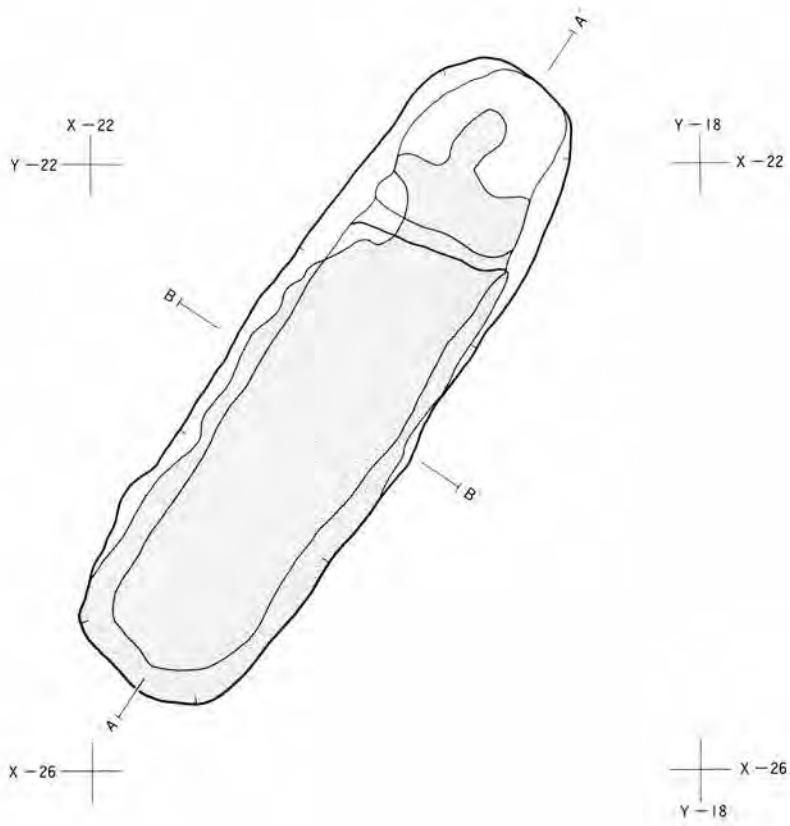
埋土は3層に大別できる。A1、A2層は、軟らかい暗褐色土を基本土とする褐色土混じりの層で、炭粒を含む。B1層は、黄褐色土を基本土とする暗褐色土混じりの層である。C1層は、固めの黒褐色土を基本土とする暗褐色土混じりの層で、多量の炭粒、焼土を含む。

土壙が埋められた状態で操業されており、床の焼土面は、北の一部分を除いて全域に広がり、南東部で壁面まで及んでいる。焼土の範囲は網点で示した。

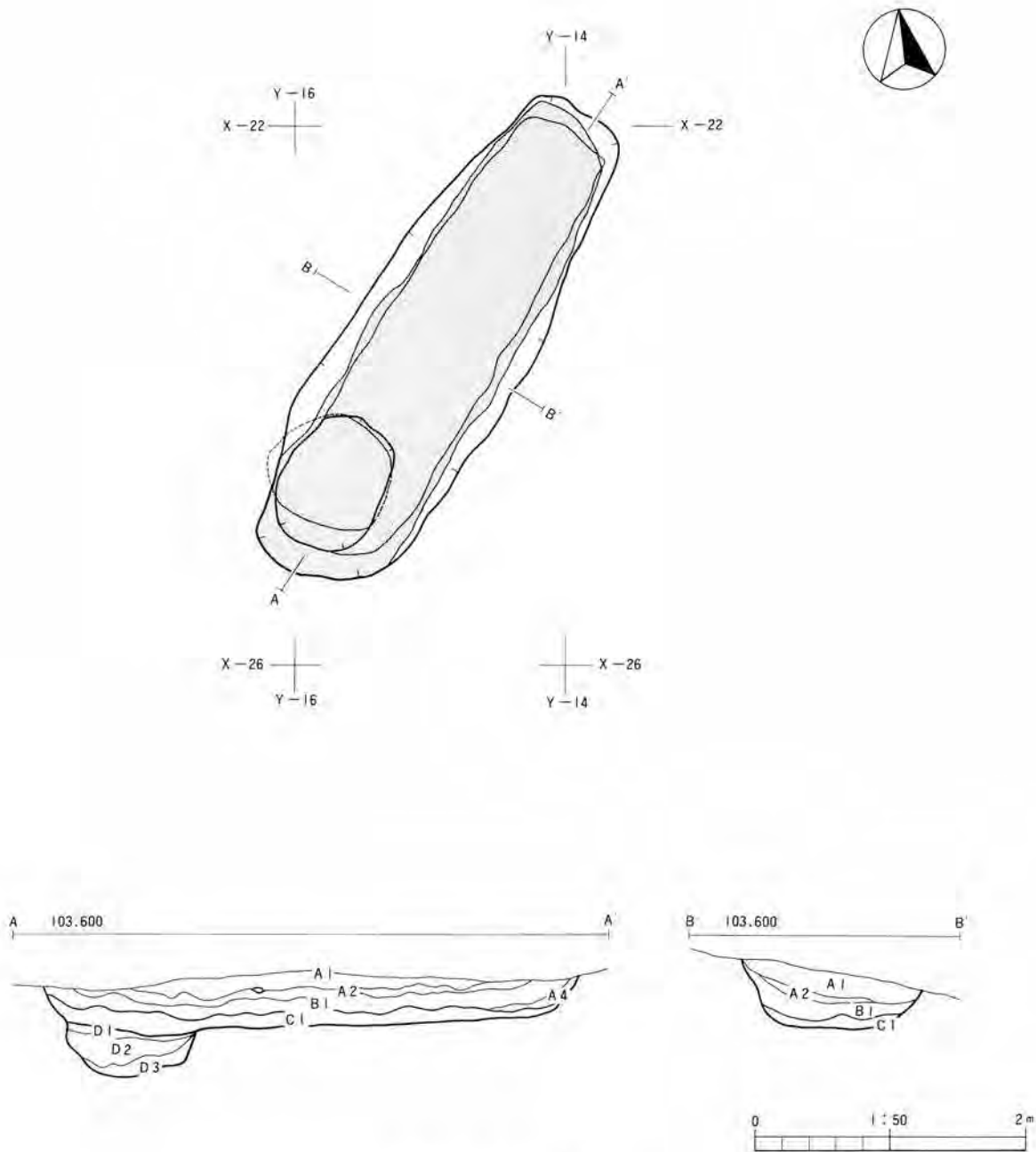
土壙の平面形は、不整楕円形を呈す。規模は、約120cm×90cmを測り、深さは床面から約20cmである。床面、壁は凹凸がやや目立つ。埋土は1層である。D1層は、軟らかい黒褐色土を基本土とする明黄褐色土が多く混じる層で、大量の粒状、塊状の木炭を含んでいる。床面と壁面の全面を炭粒、炭塊が貼り付くように覆っていた。

遺物は、土壙から大量の炭を検出している。





第18図 第1号炭窯跡

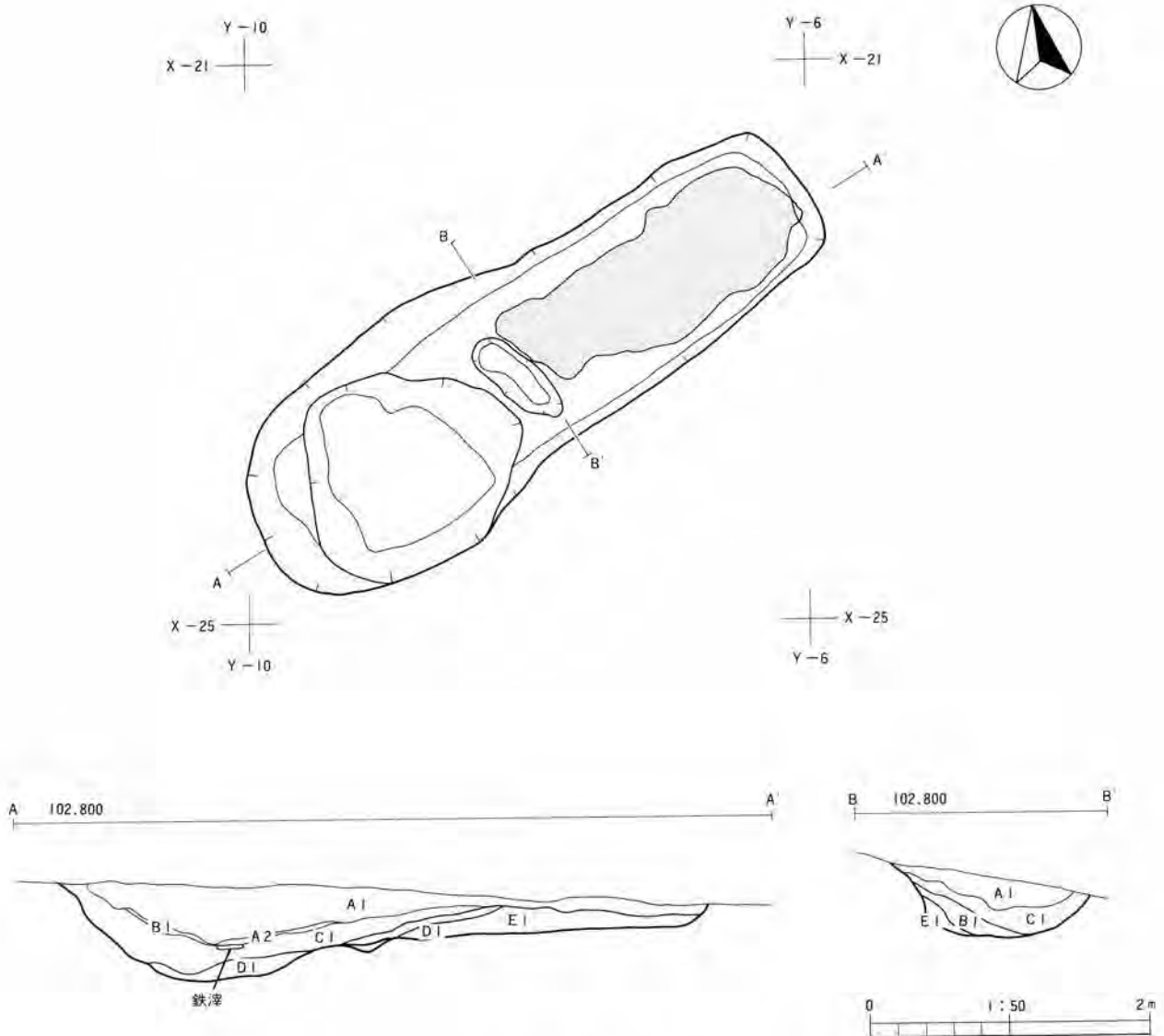


第19図 第2号炭窯跡

**第2号炭窯跡 (第19図)**

遺構は、C区北部の中央に位置し、作業場と同じ等高線上にある。平面形は、隅丸の長方形を呈す。規模は、約400cm×約130cm、深さは約40cmを測る。壁は外傾しながら立ち上がる。床面は平坦であるが、南端部に土壌が掘られている。

埋土は4層に大別できる。A1、A2層は、軟らかい褐色土を基本土とするにふい黄褐色土混じりの層である。B1層は、やや固めの黄褐色土を基本土とするにふい黄褐色土が混じる層である。C1層は、暗褐色土を基本土とする黒褐色土混じりの層で、木炭、焼土、細礫が多く含まれている。



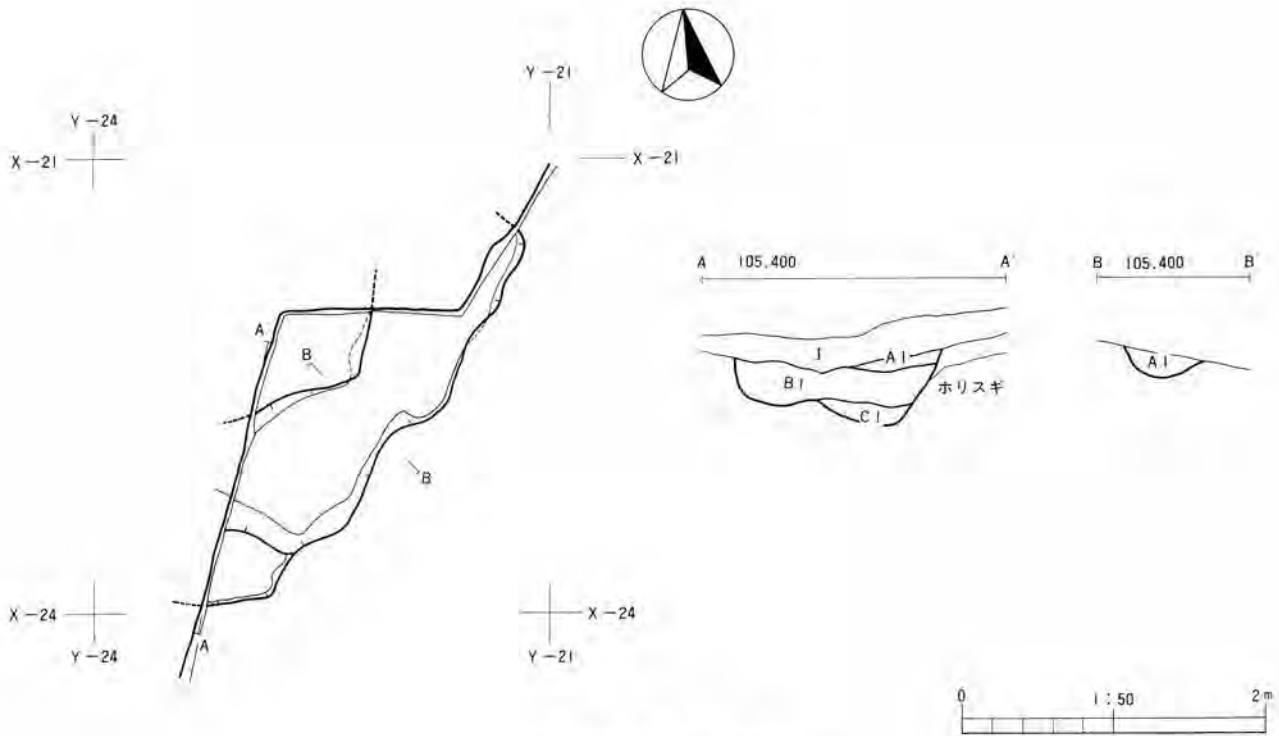
第20図 第3号炭窯跡

第1号炭窯跡と同様に土壌が埋まった状態で作業されている。床の焼土面は全域に広がり、南部では壁の全面を覆っている。焼土層厚は最大で2cm程度である。

土壌の平面形は、不整形円形を呈す。規模は、約100cm×約80cm、深さは床面から35cmを測る。壁は内湾しながら立ち上がり、床面はやや起伏が目立つ。

埋土は1層である。D1、D2、D3層は、軟らかい黒褐色土を基本土とする褐色土混じりの層で、大量の木炭、細礫、粘土塊を含んでいる。

遺物は、やはり土壌から大量の炭が検出している。



第21図 第1号土坑跡

### 第3号炭窯跡 (第20図)

遺構は、C区北東部に位置する。平面形は、隅丸の長方形を呈す。規模は、460cm×最大幅180cm、深さは最深部で55cmを測る。壁は外傾しながら立ち上がる。床面は平坦であるが、西端部に土坑が掘られ、平面形は不整形を呈する。規模は径約165cm、深さは炭窯床面から約30cmを測る。土坑の東の床面に長楕円形の浅い掘り込みをもつ。深さは約10cmを測る。

焼土の残存範囲は土坑の上面まで及んでおらず、土坑の壁、床面にも焼成を受けた形跡は見られなかった。操業面は土坑の東側に限られていた可能性がある。

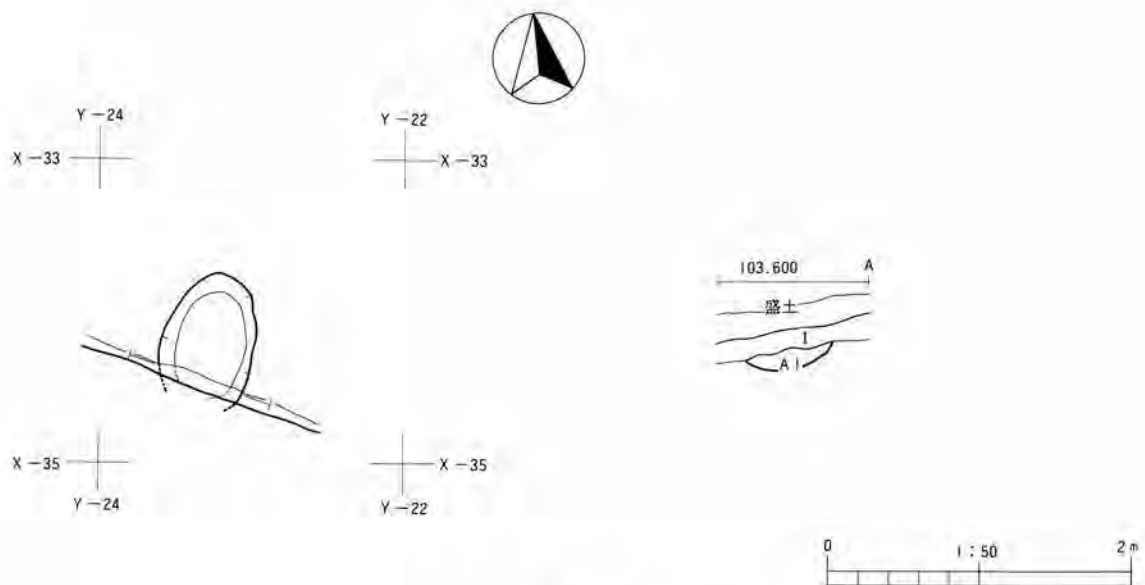
埋土は5層に大別される。A1層は、軟らかい暗褐色土を基本土とする黄褐色土混じりの層で、わずかに木炭粒を含む。B1層は、黒褐色土を基本土とする明黄褐色土が混じる層で、木炭と大きめの鉄滓が1点出土している。C1層は、やや固めの褐色土を基本土とし、暗褐色土、明黄褐色土が混じる層である。D1層は、明黄褐色土を基本土とする黒褐色土混じりの層で、木炭を大量に含む。E1層は、黒褐色土を基本土とする暗褐色土混じりの層で、木炭、焼土を含む。

遺物は、A3層から炭と鉄滓が検出している。

### 第1号土坑跡 (第21図)

C区の北端で遺構の一部が溝状の遺構をともなって検出されている。検出の際上部を掘り過ぎ、平面形の確認ができなかった。埋土層からみて、炭窯の端部を成していたもので、溝状の遺構とは時間差があるものと考えられる。土坑の規模は、幅135cm、深さ約30cmを測る。溝の規模は、最大幅70cm、深さは約15cmを測る。

土壇の埋土は3層に分かれる。A 1層は、赤褐色土混じりの黄褐色土を基本土とし、少量の炭を含む。B 1層は、炭粒と粘土粒を大量に含む暗褐色土層である。C 1層は明褐色土混じりの褐色土層で、少量の炭を含む。溝の埋土A 1層は固い褐色土層で、炭粒や粘土粒を少量含む。遺物は検出されていない。



第22図 第2号土壇跡

**第2号土壇跡**（第22図）

遺構はC区南西部の際で検出している。平面形は楕円形を呈し、規模は推定で90cm×60cm、深さは15cmを測る。埋土は軟らかい暗褐色土を基本土とし、少量の炭粒を含む。

遺物は検出されていない。

#### 遺構外出土遺物（第23図～第27図）

遺物は、羽口、鉄滓（流動滓、炉壁を嚙んだ鉄滓を含む）、土器、石器などである。羽口、鉄滓はⅢ層から、土器、石器は主にⅣ層からそれぞれ出土している。また、出土地点は、炉跡、炭窯跡などの遺構の東斜面である。鉄滓については表1にまとめた。

8～15は羽口である。先端部、あるいは先端部に近い部分の残存である。スクリーントーンによる外面の斜線は灰色に変色した部分を示し、内面の網点は黒色に変色した部分を示す。

9は内径3.0～3.2cmを測る。他の羽口の内径は、推定で3.2～3.7cmを測る。外面にヘラナデ調整痕をもつものがある（8、14）。胎土は、いずれも橙～黄橙で、細かい白い粒を少量含む。

16～42は土器である。

16～18は口縁部で、沈線の間に交互刺突文が施される。天王山式に相当するものと思われる。

19は沈線による区画文が施文される。

22は台付浅鉢で、口縁部を沈線が巡る。23は口縁部の外面に平行沈線が施され、口唇部は外反し、刻目が施される。22、23は大洞C2式に相当すると思われる。

24は波状口縁で、波頂部に円い刺突痕を持ち、入組区画文が施される。十腰内I式に相当する。

29は、隆起線による磨消繩文が施され、大木10式に相当する。

25は口縁部が外反する深鉢で、胴部に磨消しによる区画文を施す。26～28は沈線により区画文と磨消しを伴う。25～28は大木10式に相当する。

30、31は隆沈線による施文である。大木8b式に相当する。

32は深鉢で綾絡文による施文である。33、34は32と同一個体と思われる。大木8b～10に相当するものと思われる。

35～39はいずれも深鉢の口縁部である。また、いずれも口縁部上端は無文である。35は複合口縁である。

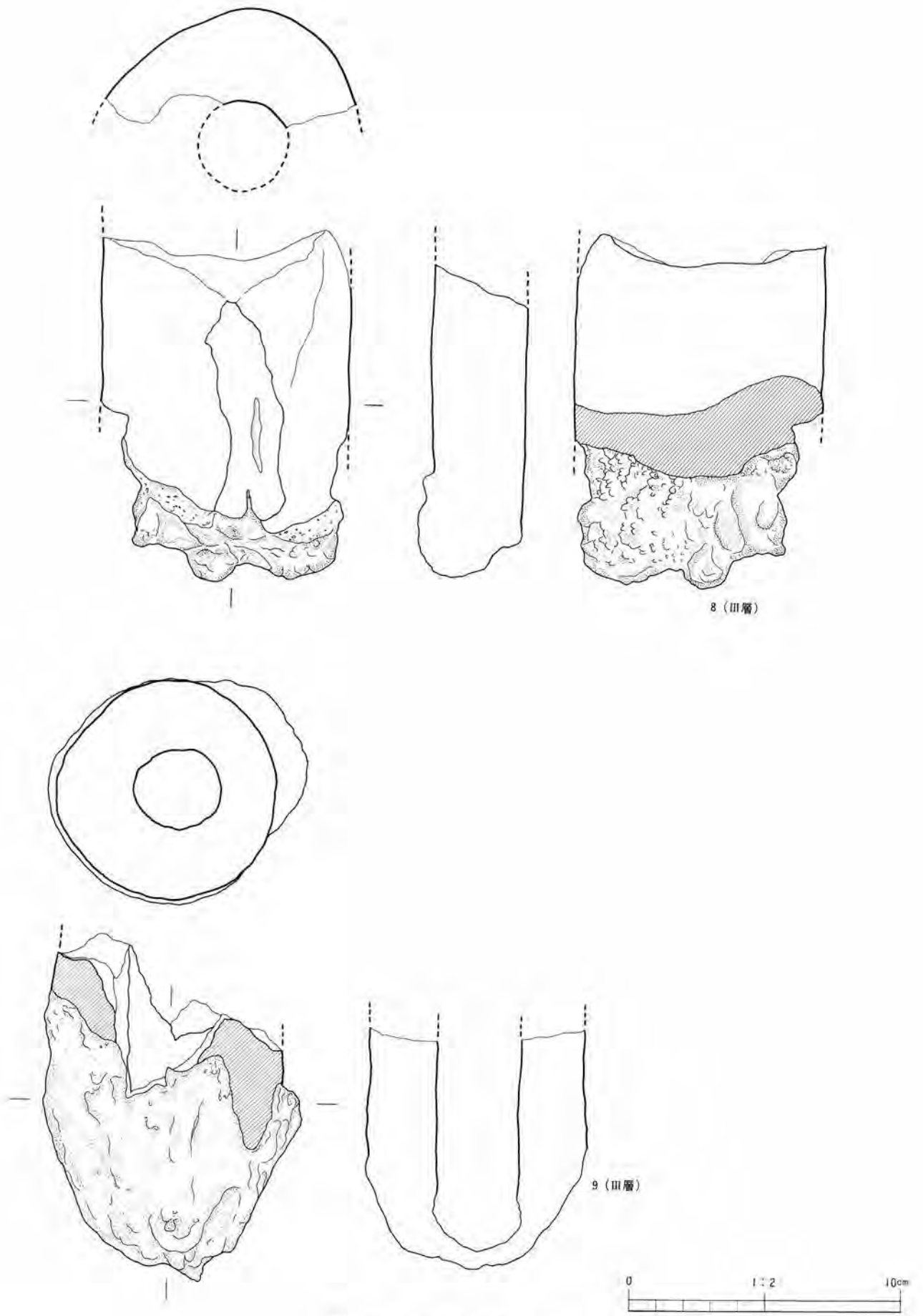
40は繊維を含んでいる。41、42は小形深鉢の底部である。

43～49は石器である。

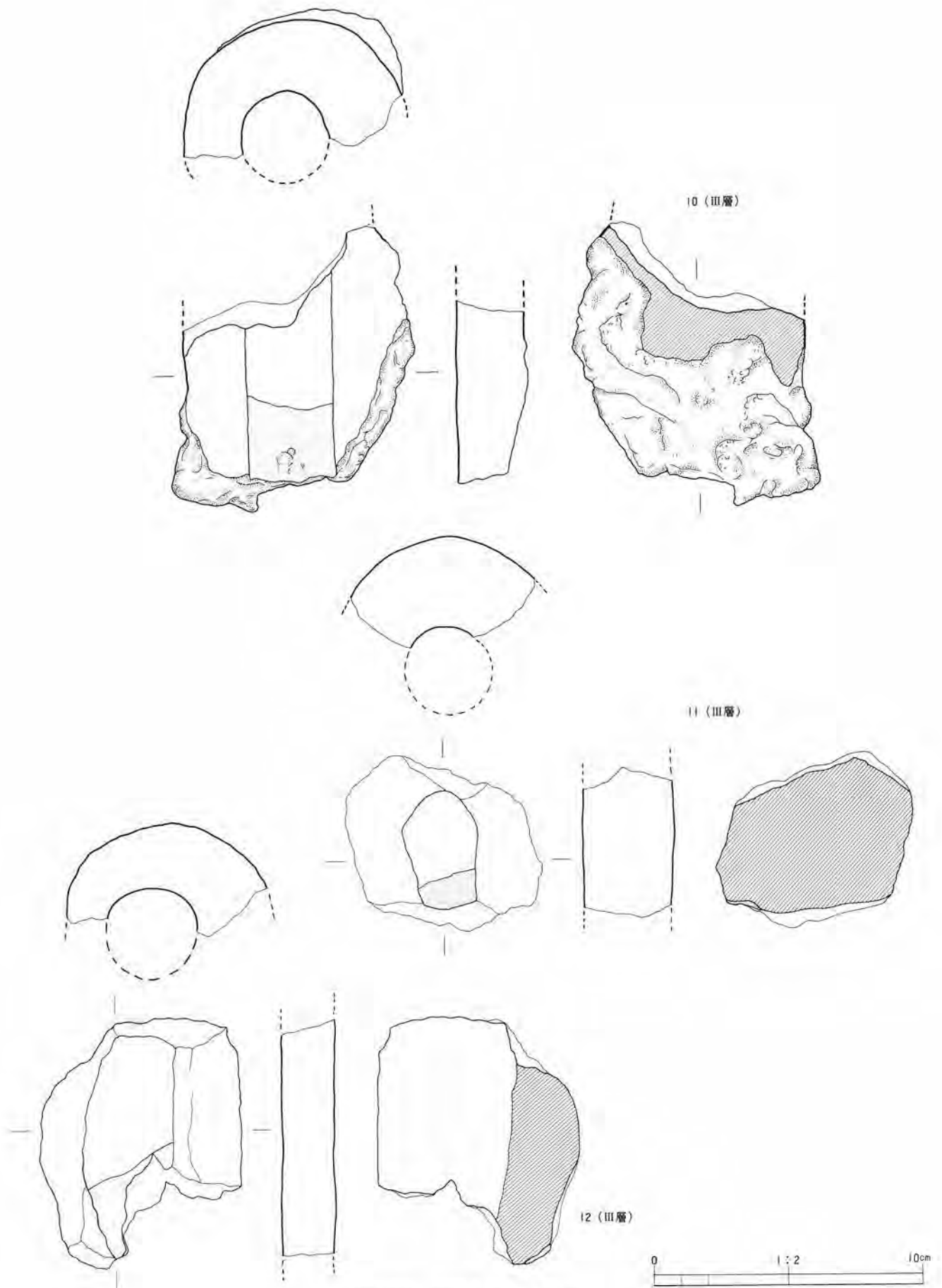
43、44は磨製石斧である。43は刃部を欠いている。44は敲打整形時の敲打痕をほぼ全面に残し、また成形時の剝離痕を残す。

45～48は敲石である。46～48は扁平な自然礫の周縁部を使っており、周縁部に敲打痕と剝離痕を残す。

49は石鏃である。凹基で、側縁は直線的に処理され、わたくりは深めである。

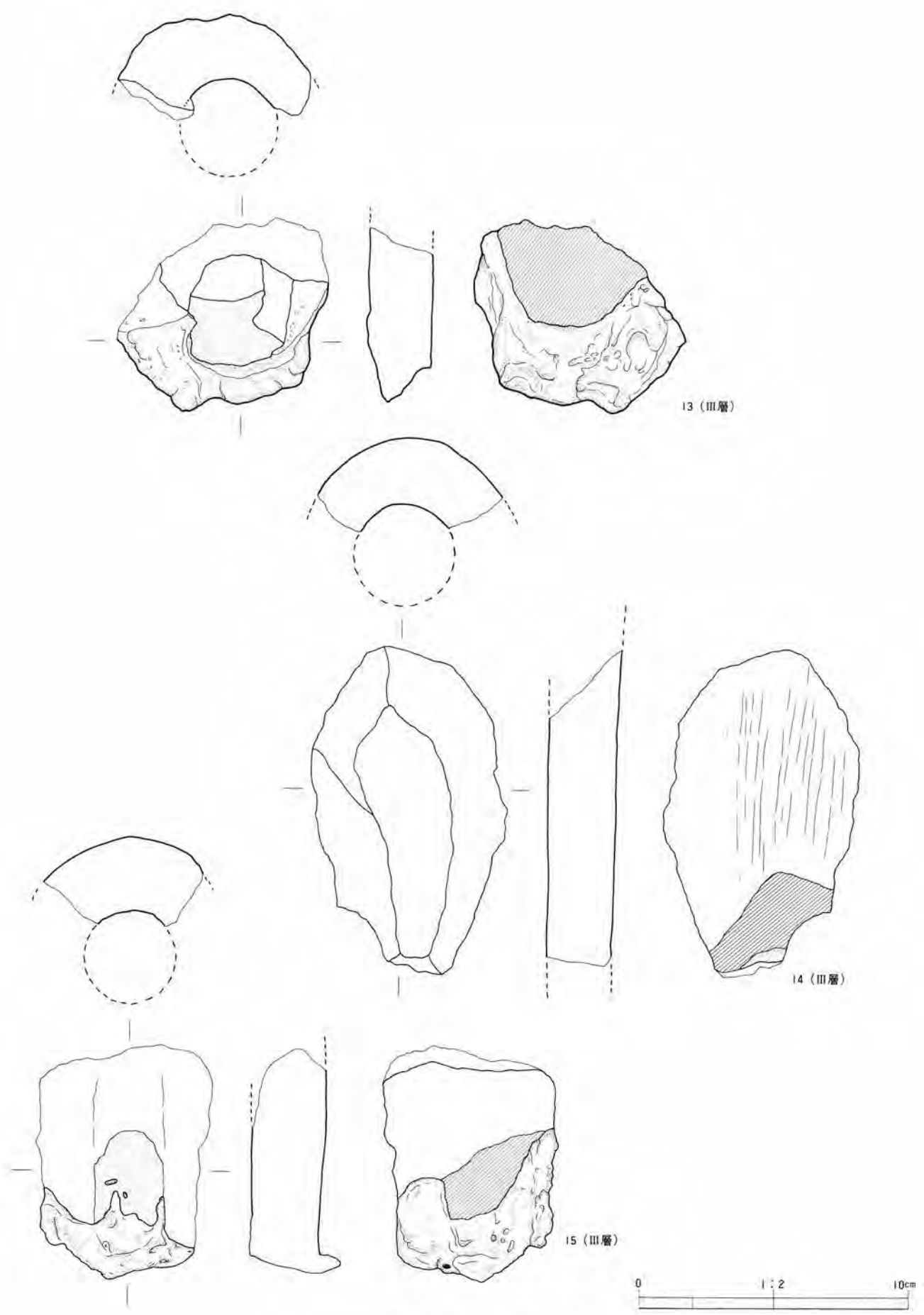


第23図 遺構外出土遺物(1)

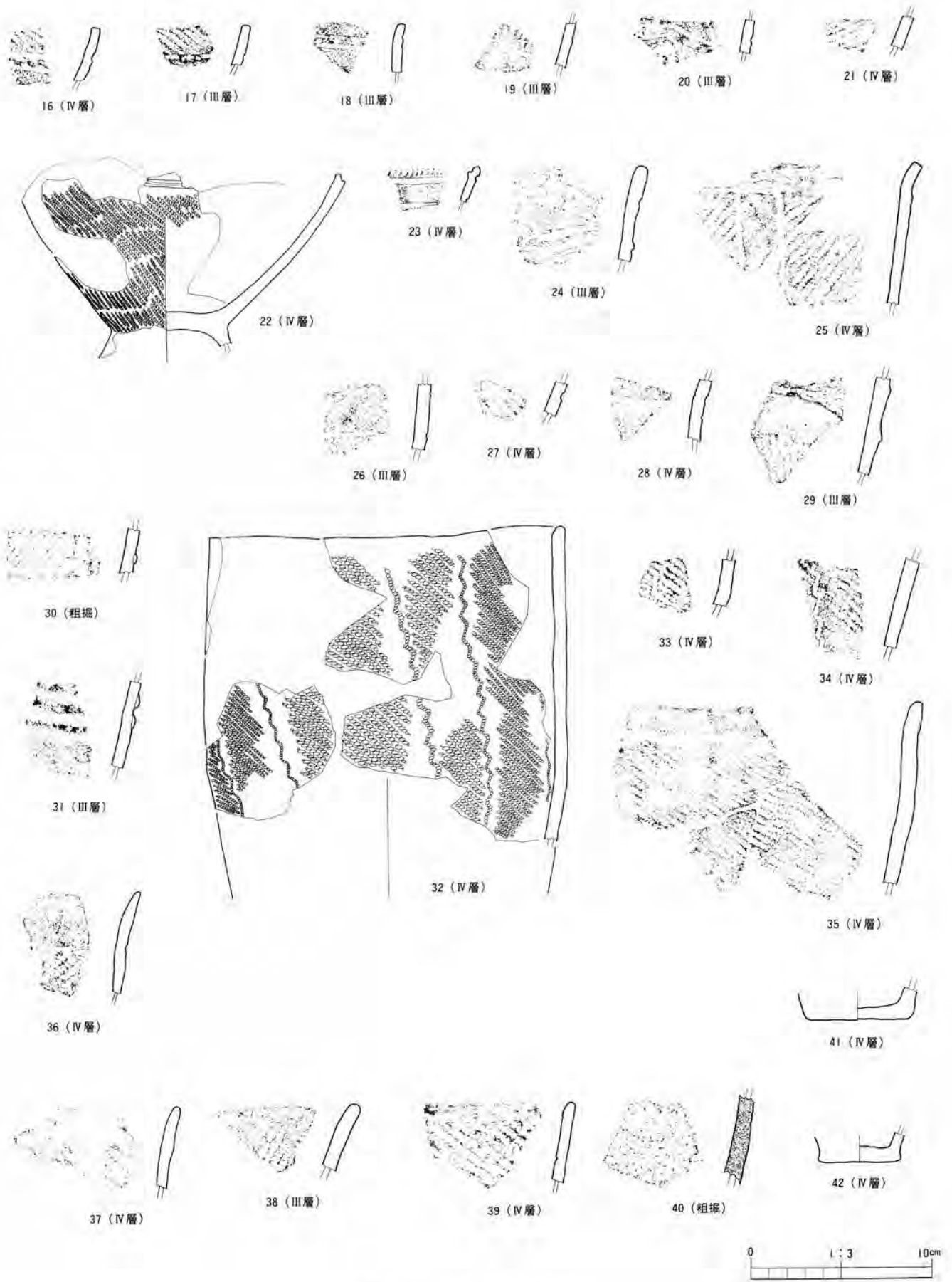


第24図 遺構外出土遺物(2)

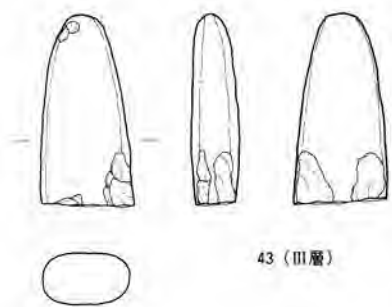




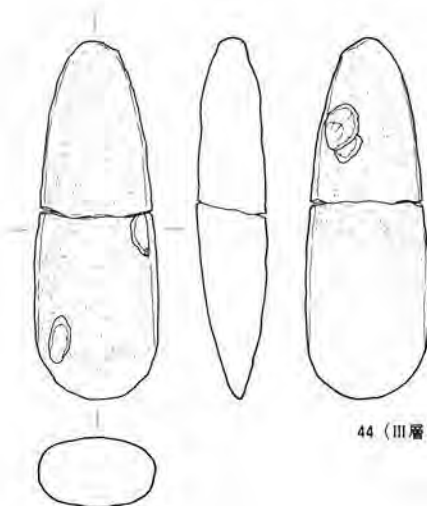
第25図 遺構外出土遺物(3)



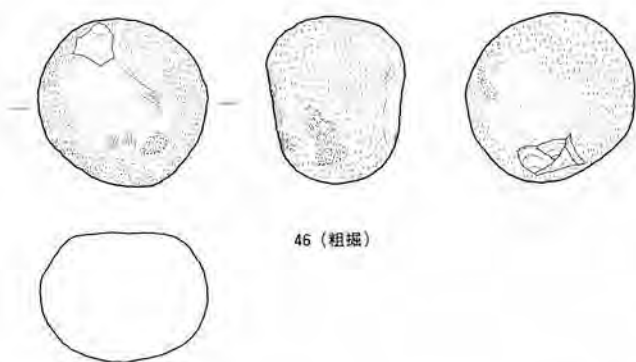
第26図 遺構外出土遺物(4)



43 (III層)



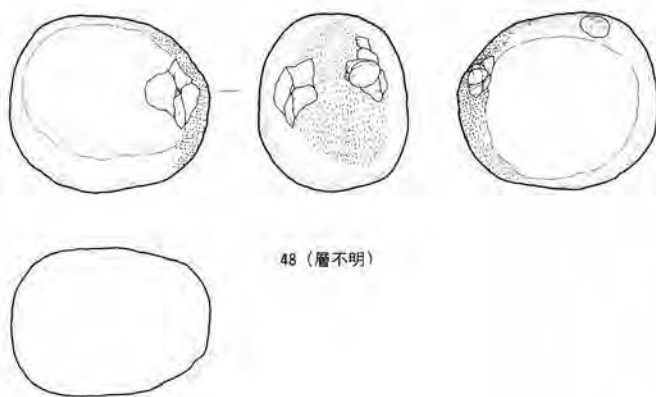
44 (III層)



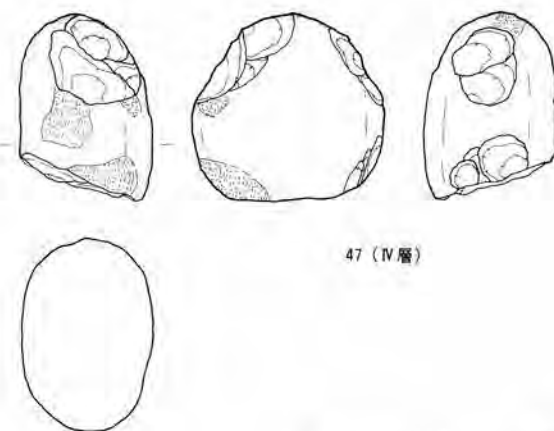
46 (粗掘)



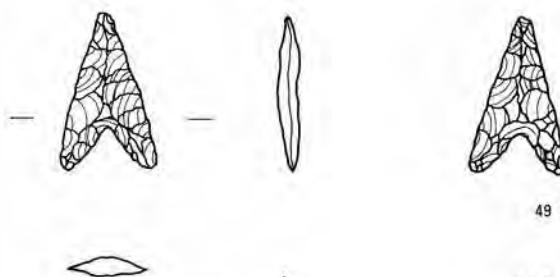
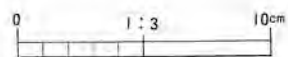
45 (III層)



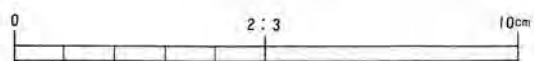
48 (層不明)



47 (IV層)



49 (III層)



第27図 遺構外出土遺物(5)

### 鉄滓の分布と計測値

鉄滓は第1号炉跡の南の斜面を中心に分布している。流動滓と炉壁を噛んでいる鉄滓は取り分けて別に計測を行った。炉壁はすべてスサを含んでいる（→第13図版）。

（単位 g）

反応度	鉄 滓				流動滓	炉壁を噛んだ鉄滓	計
	N	L	M	H	N	N	
層名							
III	86,890	1,025	1,115	1,560	63,187	12,345	166,122
A	24,230	100	115	1,710	22,690	14,926	63,711
B	4,430	—	10	170	13,030	1,628	19,268
C	855	—	—	35	335	600	1,825
D	735	—	—	10	1,115	70	1,930
E	4,340	10	80	525	3,650	765	9,370
F	3,365	100	—	—	350	1,755	5,570
G	2,505	—	—	35	3,075	150	5,765
計	127,350	1,235	1,320	4,045	107,432	32,239	273,621

表1. 鉄滓の分布と計測値

計測にはメタルチェッカーを使用した。

N、L、M、Hは鉄滓に含まれる金属の残留度合を示す。

N→金属鉄を含まない。

L→やや大きな金属鉄を残留する。

M→ごく一般の金属鉄を残留する。

H→小さな金属鉄を残留する。

## IV 調査のまとめ

製鉄遺跡は、宮古市では重茂地区を除いたほぼ全域で確認されており（重茂地区では、大量の鉄滓などが確認されているが、これまでのところ炉跡などの遺構の検出例はない）、萩沢II遺跡は、崎山地区で検出された最初の製鉄遺跡である。

製鉄遺跡は未詳の部分の多い遺跡であるが、これまで確認されてきた製鉄遺跡の内容の概略を記したうえで、市内および周辺部の製鉄遺跡との比較、検討を行い、萩沢II遺跡の位置づけを試みたい。

製鉄遺跡は、大まかにみて製錬遺跡と鍛冶遺跡に分けられている。

このうち鍛冶遺跡は、さらに精錬を行う精錬鍛冶遺跡（大鍛冶）と鍛練加工を行う鍛練鍛冶遺跡（小鍛冶）に分けられている。

製錬遺跡には製錬炉を伴う。製錬炉は西日本型の長方形箱型炉と東日本型の半地下式堅型炉の2つに大別され、前者は平坦面に構築され、後者は斜面を利用して構築される例が多い。また、岩盤を掘り込み、木炭や粘土を使って炉床を築くなどの防湿施設を有して、大量の鉄滓が出土すること等が大きな特徴である。

鍛冶遺跡は、小鍛冶の場合、仕事の性質上住居内あるいはその周辺から出土する例が多い。一般に鍛冶炉は製錬炉に比べると規模が小さく、平坦面を円形あるいは楕円形に浅く掘り窪めて構築されている。遺物は、鉄塊系遺物（金属鉄を多く含む鉄滓）が多く、鍛造剥片（ハンマースケール）等を伴うのが大きな特徴であり、製品、工具等が出土する場合もある。

大鍛冶遺跡については、近世の所謂永代たたらに伴って出土している例はあるが、古代のものは確認されていないし、小鍛冶との明確な区別もなされていない。註1

萩沢II遺跡の炉跡の立地状況としては、緩斜面上に位置し、背後に作業場を持ち、周辺部に炭窯を伴っていることが挙げられる。作業場を持ち、斜面に位置するという点では平安時代の製錬炉跡が出土した青猿I遺跡（市内千徳地区）と共通しており、同様の立地状況をもつ製錬遺跡は東日本型に多い。註2

炉の構造は、地表面に露出した焼土層や還元焼成を受けた部分が半円形をなしていることから、炉の平面形はほぼ円形であったと推測される。青猿I遺跡では炉底の一部が残存し、炉底は、船底状でやや傾斜をなしていたことが確認されている。本遺跡では、炉底部の残存は認められなかったが、炉床の地下構造が残っていた。その地下構造から炉底の形を推測してみると、中央は船底状に窪み、南に傾斜していたと思われる。

粘土、木炭を交互に敷くという本遺跡のような地下構造は、青猿I遺跡では観察されなかったが、根井沢I遺跡（市内津軽石地区）では同様の地下構造を持つ製鉄炉跡が確認されている。註3

萩沢II遺跡の炉跡の大きな特徴は、炉の前庭部を大きく掘り込んでいる点である。廃滓溜めとして掘られたことは間違いないとしても、斜面を利用しながらわざわざ掘り込みに溜めたのかということが問題になると思われる。炉底に必要な傾斜角が自然の傾斜では足りないので、掘り込まざるを得なかった、あるいは廃滓をどこか他所に運ぶために一旦前庭部に溜めていた（製錬炉としては鉄滓の量が少ない）、ということ等が考えられる。

平面形は円形で、底は船底状になって傾斜しているという炉の形状から、地下の部分の掘り込みが浅いという問題点があるものの、半地下式の炉と見なしてよいと思われる。

遺物の内容は、羽口と鉄滓である。羽口の孔径は3cm前後にほぼまとまっている。鉄滓は、総重量約273kgで、流動滓や炉壁を噛んだものがかなり混じっているが、鍛造剥片は全く検出されていない。

当遺跡の炉跡は、結論として東日本型の半地下式縦型炉の系列に属する製錬炉跡と思われる。炉を構築した際に、炉の前庭部に敷かれた土層には多量の鉄滓が含まれており、当炉構築以前にも操業されていた事を示し、少なくとも2時期の操業期間が想定される。一方で、前述したように製錬炉としては鉄滓の量が少ないということから、単に操業期間が短かった、あるいは鉄滓は何らかの理由で他の場所へ運ばれた、等が考えられるが、それらを解明できる資料は得られなかった。

炭窯には、覆いをつくり燃焼室を設ける「<sup>ろかす</sup>窰窯」と覆いを設けず土壌をそのまま燃焼室とする「<sup>ひがし</sup>伏窯」があり、本遺跡の炭窯は伏窯である。宮古市内では、伏窯が炉跡に伴って検出されたのは初めての事である。伏窯は、市外では上村遺跡（山田町）では、製錬炉、鍛冶炉に伴って出土し、駒板遺跡（軽米町）では、鑄銭場跡に伴って検出している。註4

いずれの遺跡においても、長短の違いはあるにしても、基本的には平面形は隅丸の長方形で、船底形に掘られている点は共通しているが、本遺跡の炭窯は、床面の片端が更に土壌状に掘り込まれているのが大きな特徴である。

第1号炭窯、第2号炭窯の床面は、ほぼ全面焼土層で覆われており、土壌が埋められた状態で操業されていたことが分かる。その土壌からは大量の木炭が出土したこと、土壌の位置（いずれも端に位置している）等からみて、炭窯に伴って意図的に掘られたものと考えられる。土壌の壁面、床面とも焼成を受けた跡もなく、塊粒状の木炭が貼り付くように残るといふ出土状況からみて、焼き上げた木炭を溜めたもので、とくに炭窯の床面を選んだ理由については、防湿効果をねらったものと推測される。

岩手県に「窰窯」式の炭窯が導入されたのは明治末年のことであり、それまでは「伏窯」が使われていた。しかし、改良窯である「窰窯」が導入されたのちも、「伏窯」を利用して主にクワの木を材料にした鍛冶炭の生産が続けられていた。註5

近世の所謂「永代たたら」が成立する以前は、原野に炉を築いて鉄を吹き、燃料が無くなると山を移動するという「野だたら」が古代から存在し、また「永代たたら」成立後も平行して続いていたと言われる。当遺跡も一時的な操業のために築いた「野だたら」の一形態と思われるが、時代を特定できるような共伴遺物が無く、前述したように明治末年以降の可能性が考えられる外は不明である。

崎山地区では、これまで縄文時代に遺跡を中心に調査が行われてきたが、今回製鉄遺跡が出土したのを機会に、製鉄文化の広がりも視野にいれながら調査を進めていきたい。

- 註1 参考文献 高橋一夫ほか「講座・日本技術の社会史 5 採鉱と冶金」(日本評論社1985)  
窪田蔵郎「日本の鉄」(小峰書店1990)  
窪田蔵郎「製鉄遺跡」(ニューサイエンス社)  
古代を考える會「河内・大県遺跡周辺の鉄・鉄器生産の検討」(1991.11)  
穴澤義功 岩手県立博物館セミナー資料「製鉄技術の東西南北」(1990.11)  
山内登貴夫「和鋼風土記」(角川選書)
- 註2 宮古市教育委員会「青猿Ⅰ遺跡、下在家Ⅱ遺跡、千徳城遺跡群」1988
- 註3 昭和63年に宮古市教育委員会が遺跡の一部の調査を行い、炉跡を確認し、大量の鉄滓を検出している。
- 註4 岩手県埋蔵文化財センター「駒板遺跡発掘調査報告書」1986  
岩手県埋蔵文化財センター「上村遺跡説明会資料」1992.6
- 註5 岩手県埋蔵文化財センター「駒板遺跡発掘調査報告書」1986





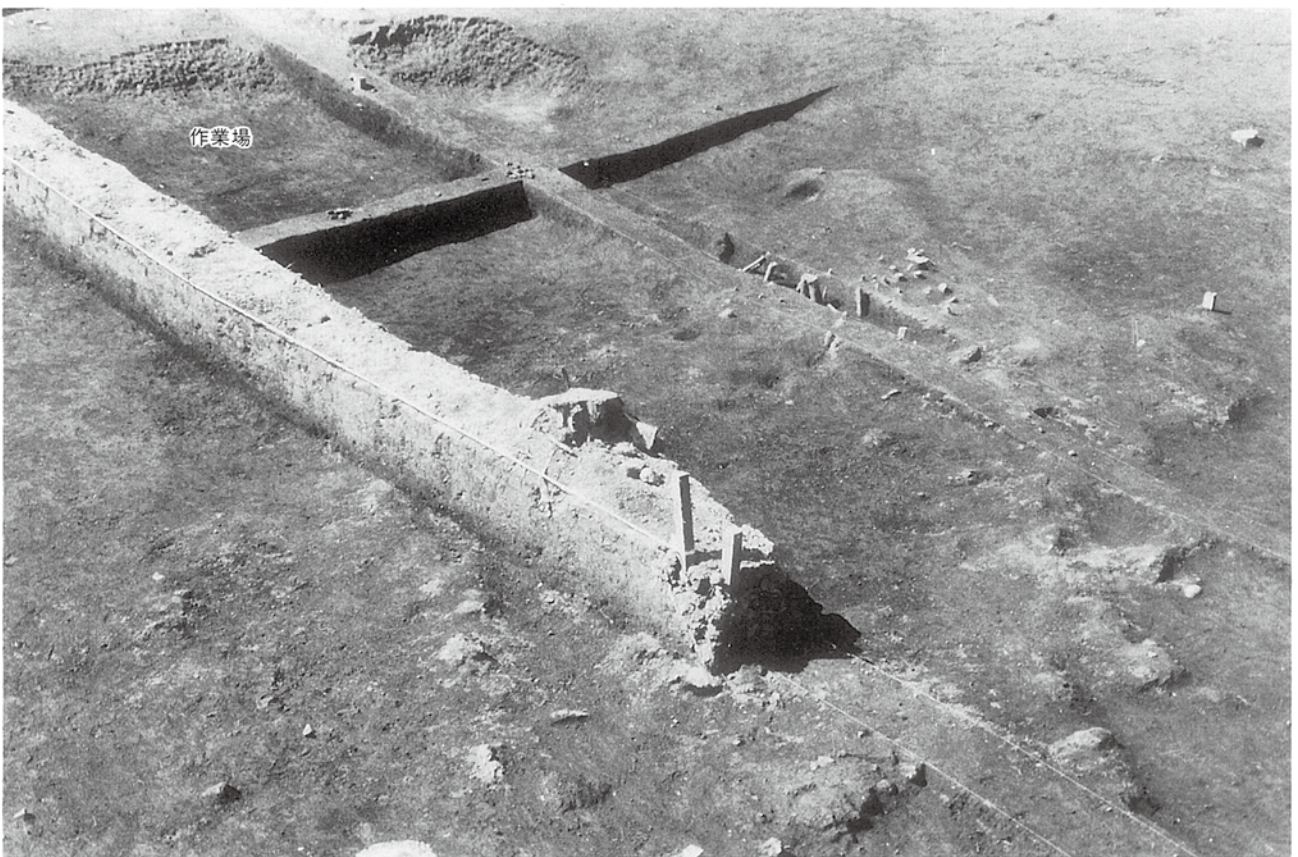
# 写 真 图 版



# 第1図版

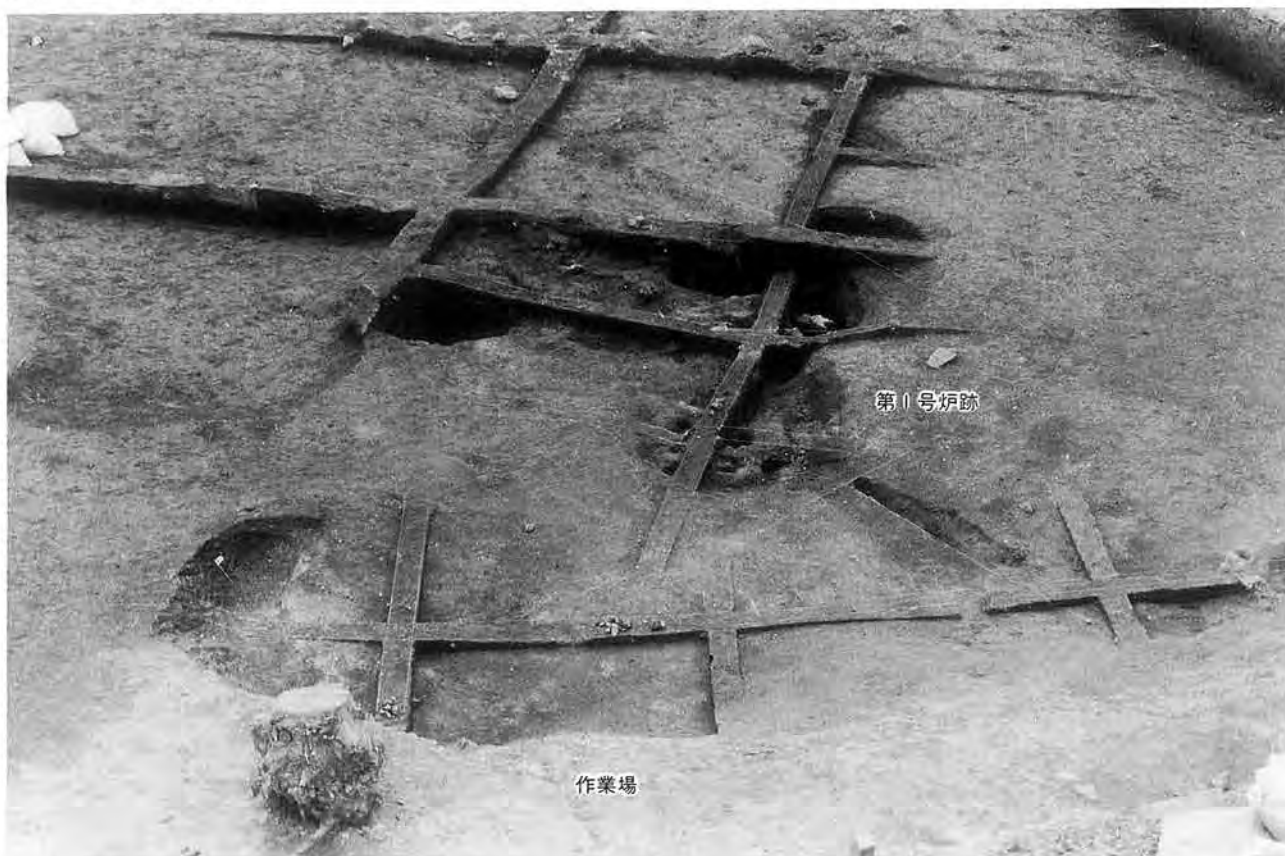


調査区遠景（南から）

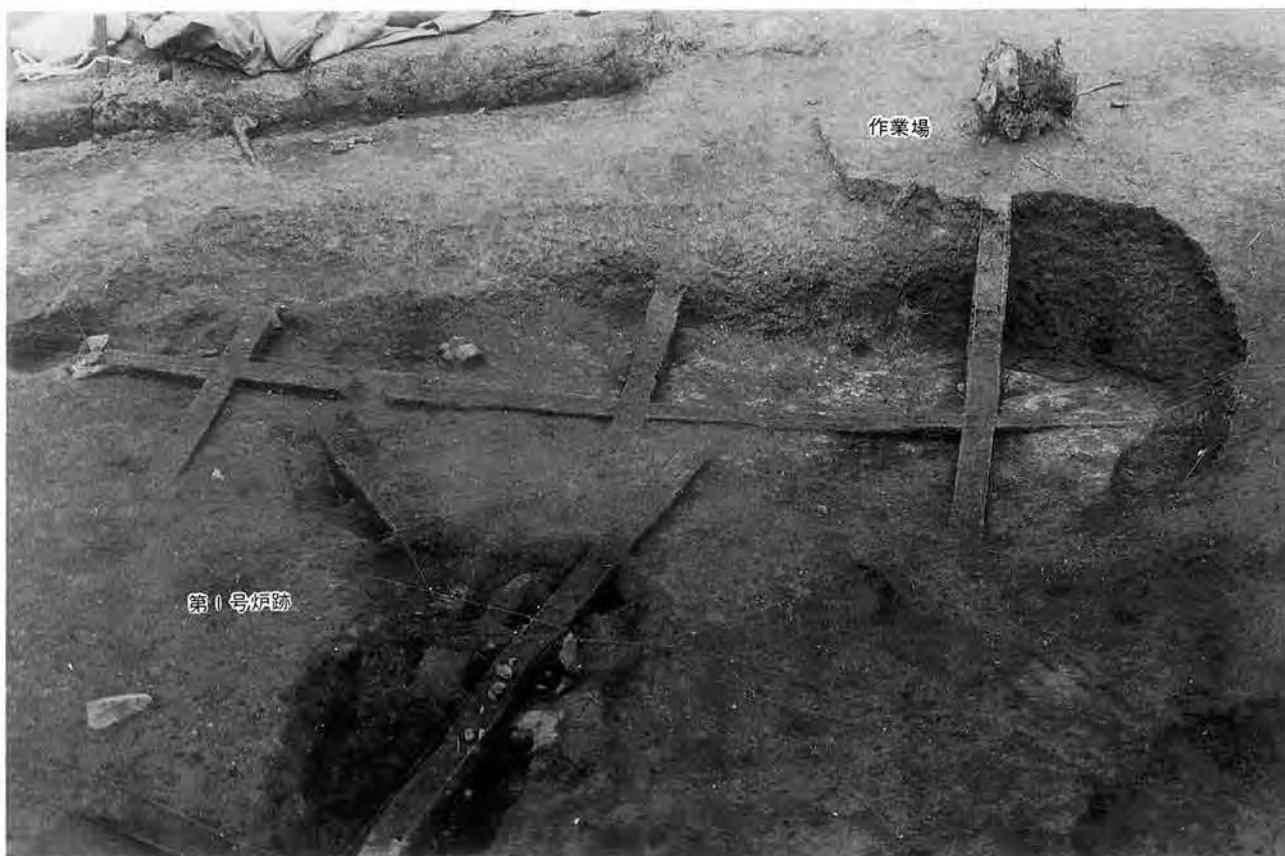


鉄滓、焼土等の出土状況

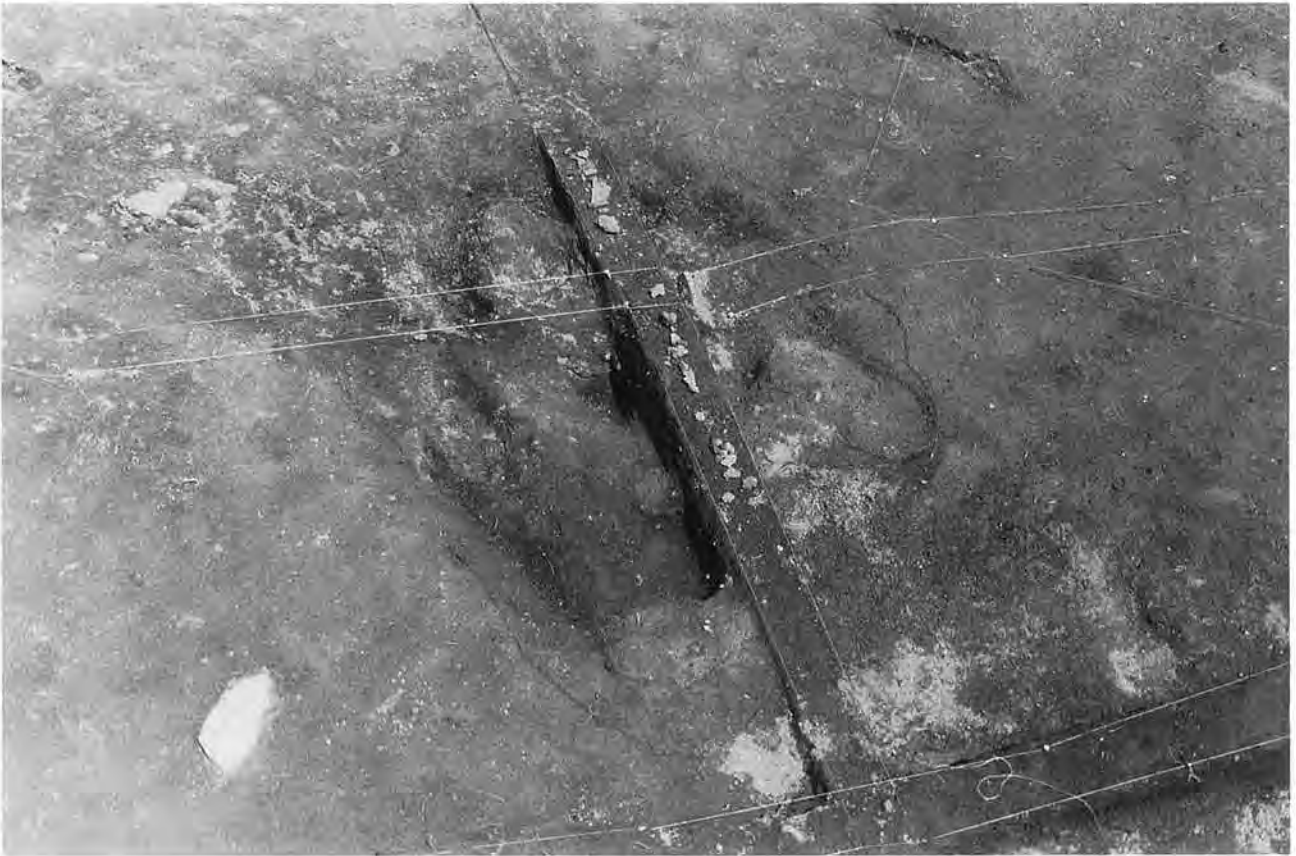
## 第2図版



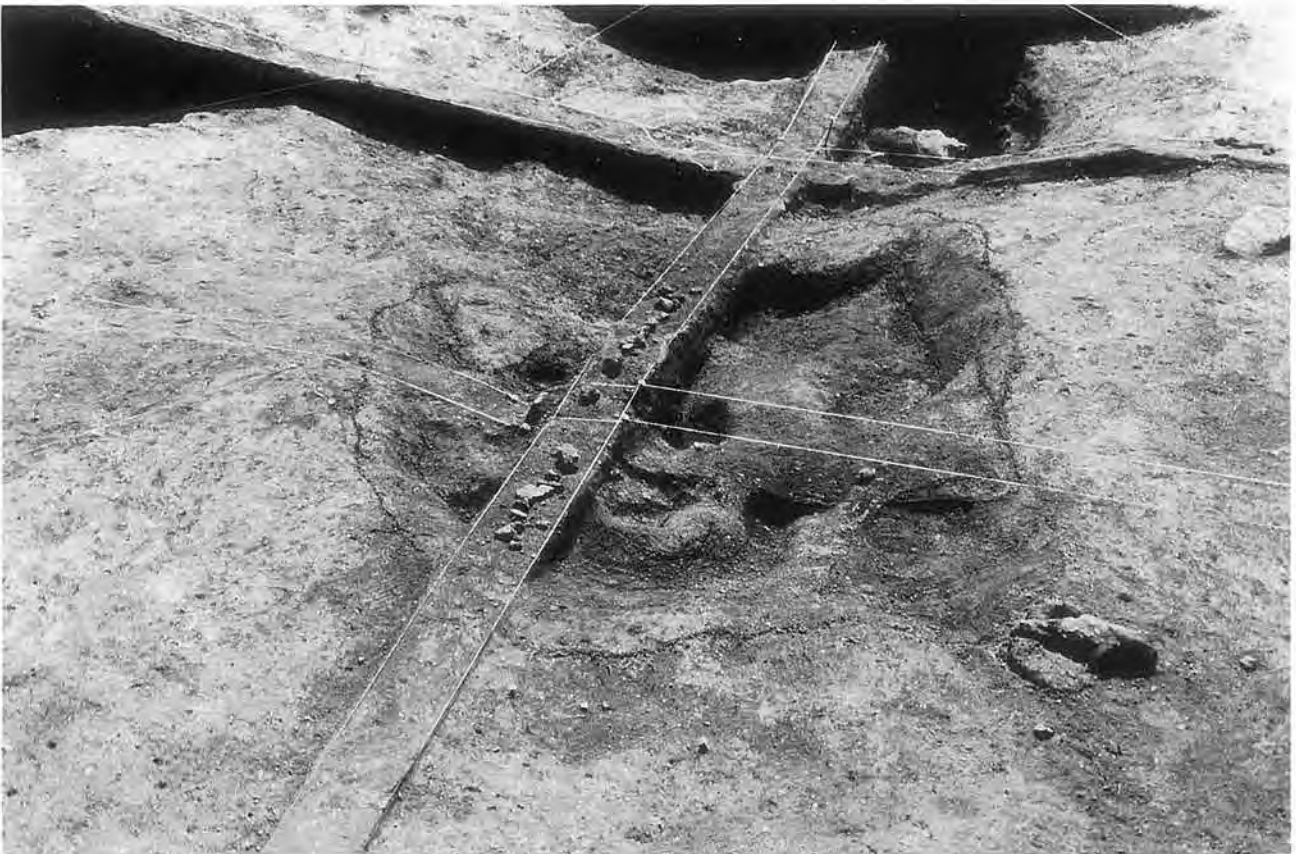
作業場と第1号炉跡（西から）



作業場と第1号炉跡（東から）

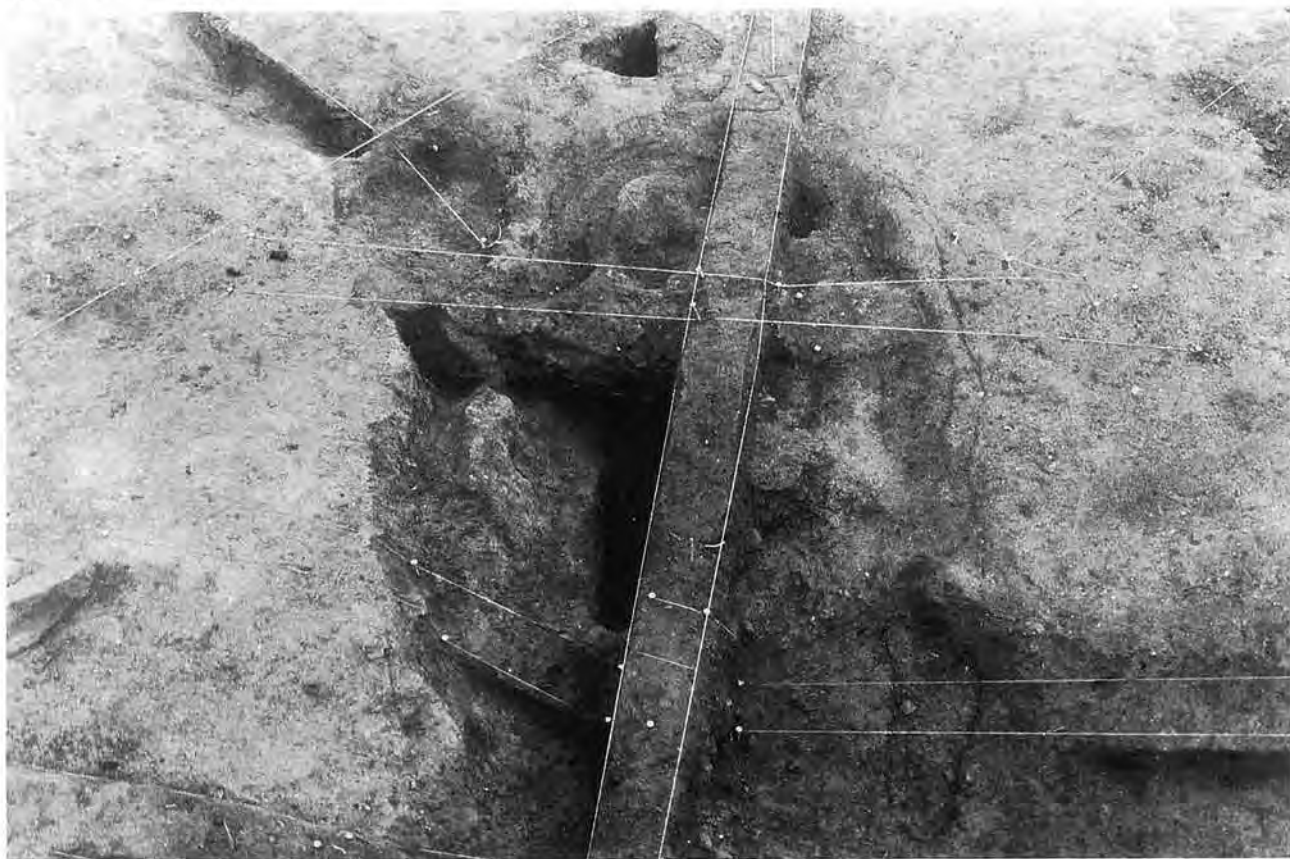


第1号炉跡炉床部出土状況1

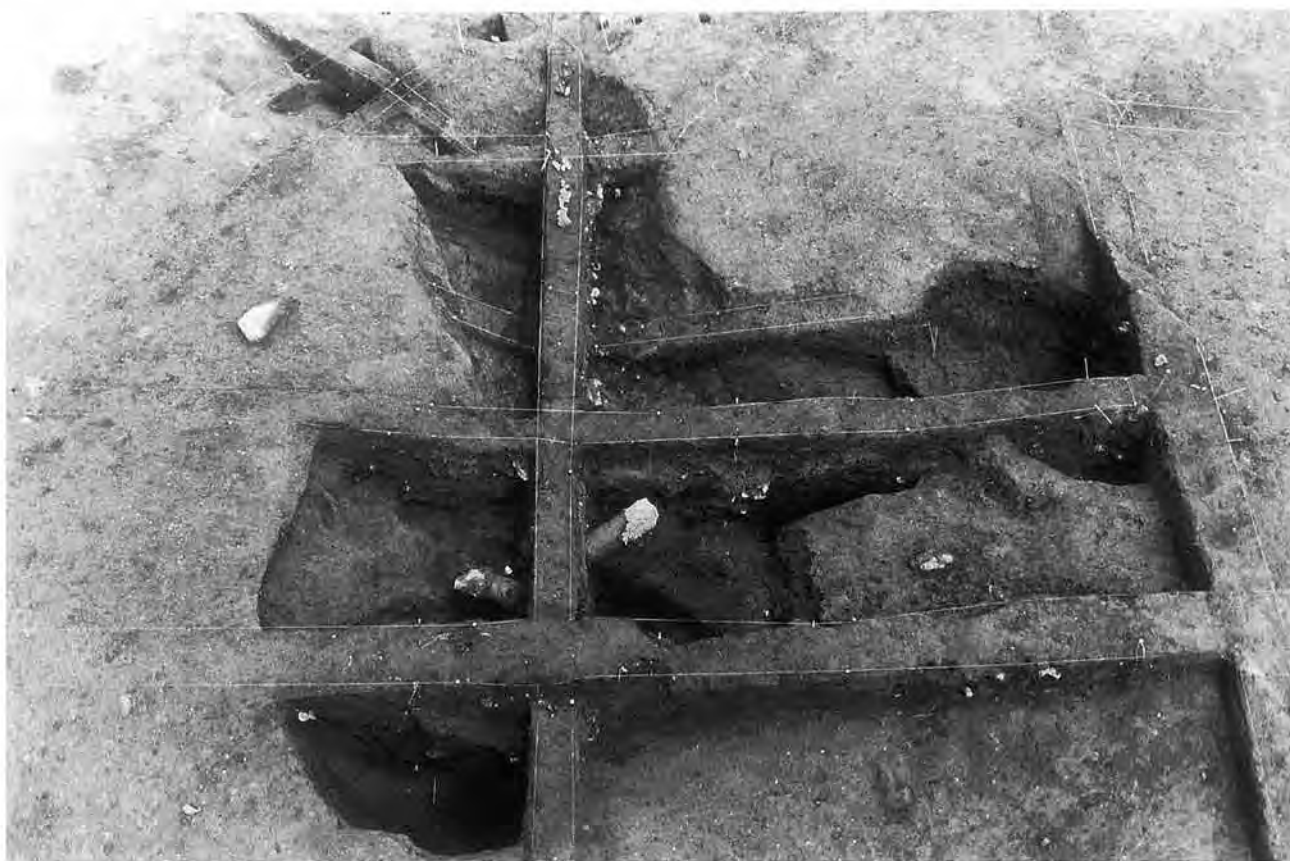


第1号炉跡炉床部出土状況2

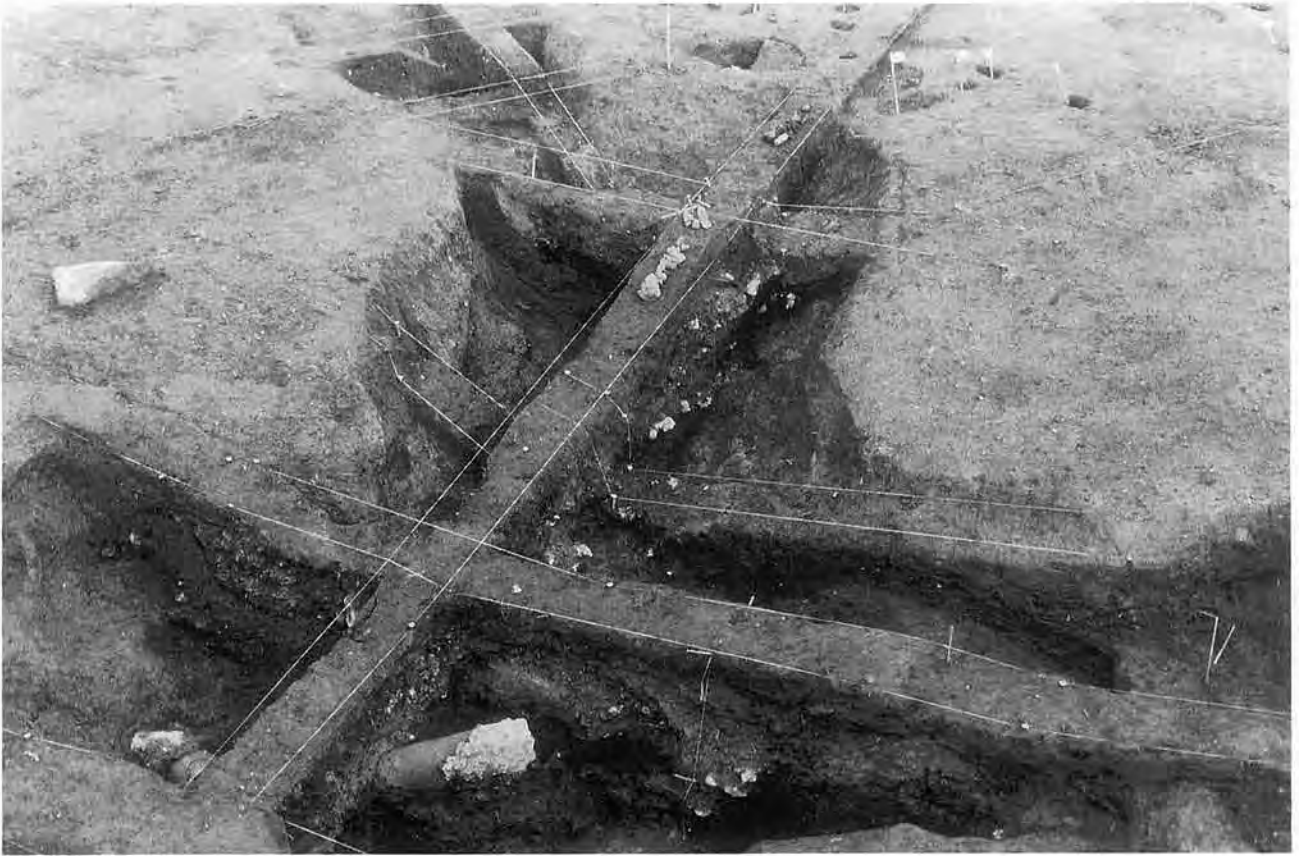
# 第4図版



第1号炉跡炉床部断面



第1号炉跡断面



第1号炉跡断面



第1号炉跡断面

# 第6図版



第1号炉跡断面



鉄滓の出土状況





調査区全景

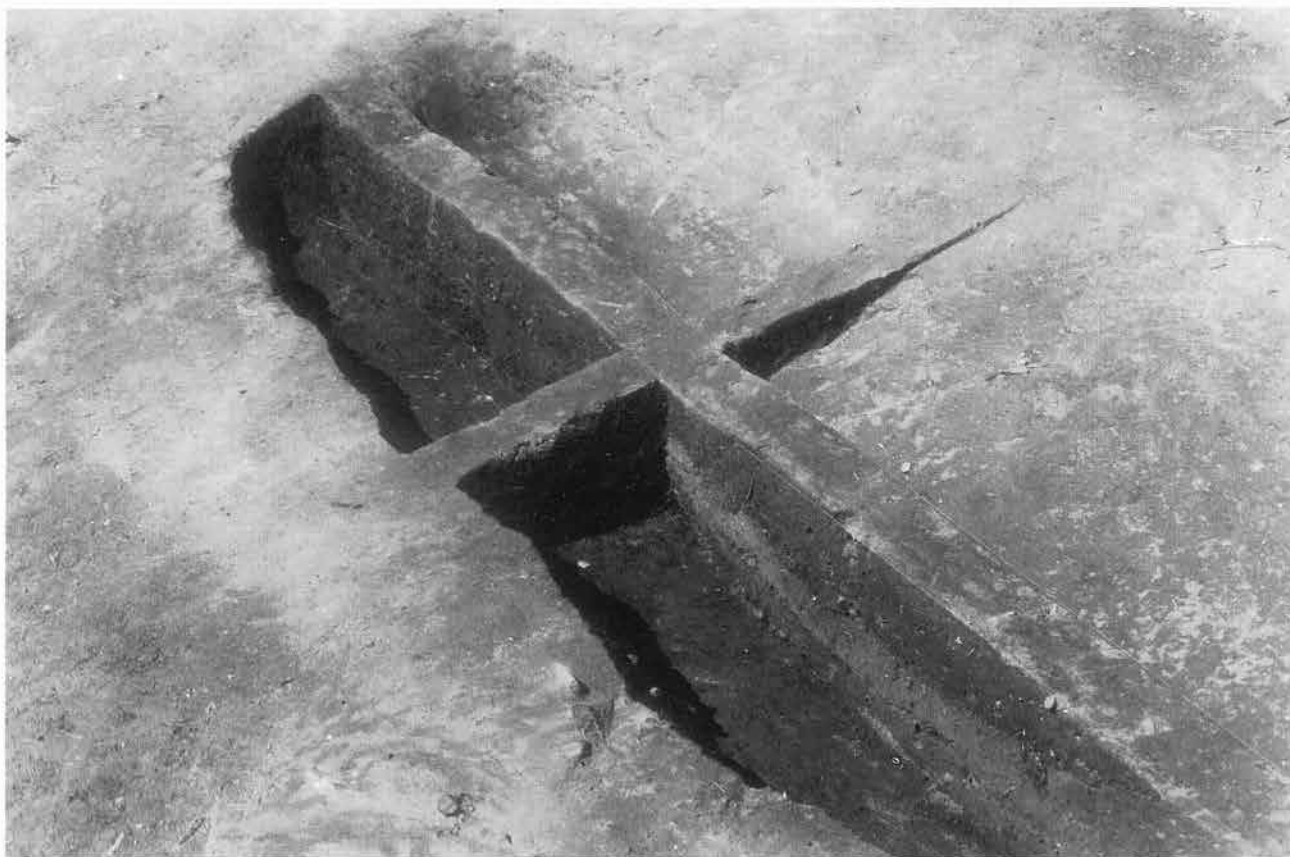


作業場と第1号炉跡

# 第8図版



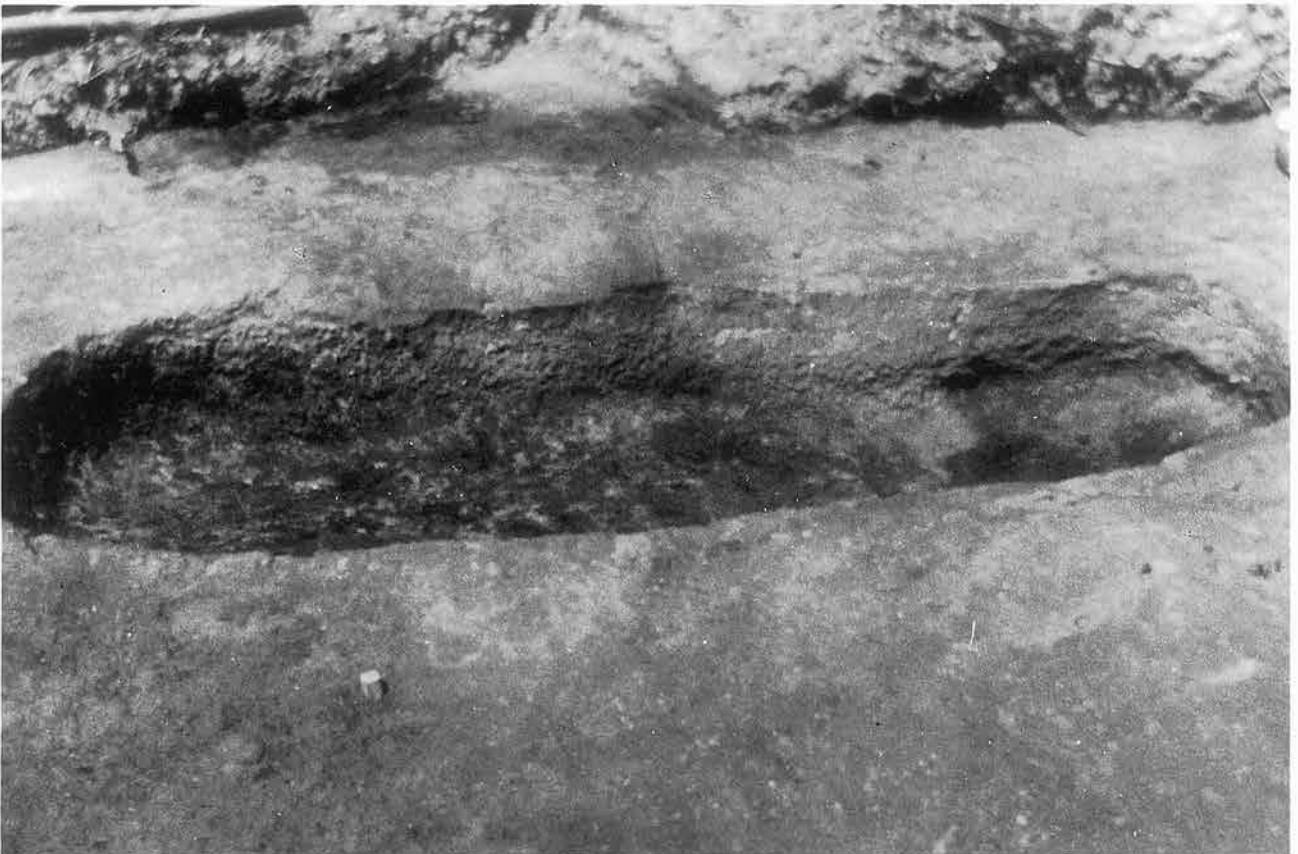
作業場と炉跡



第1号炭窯跡断面

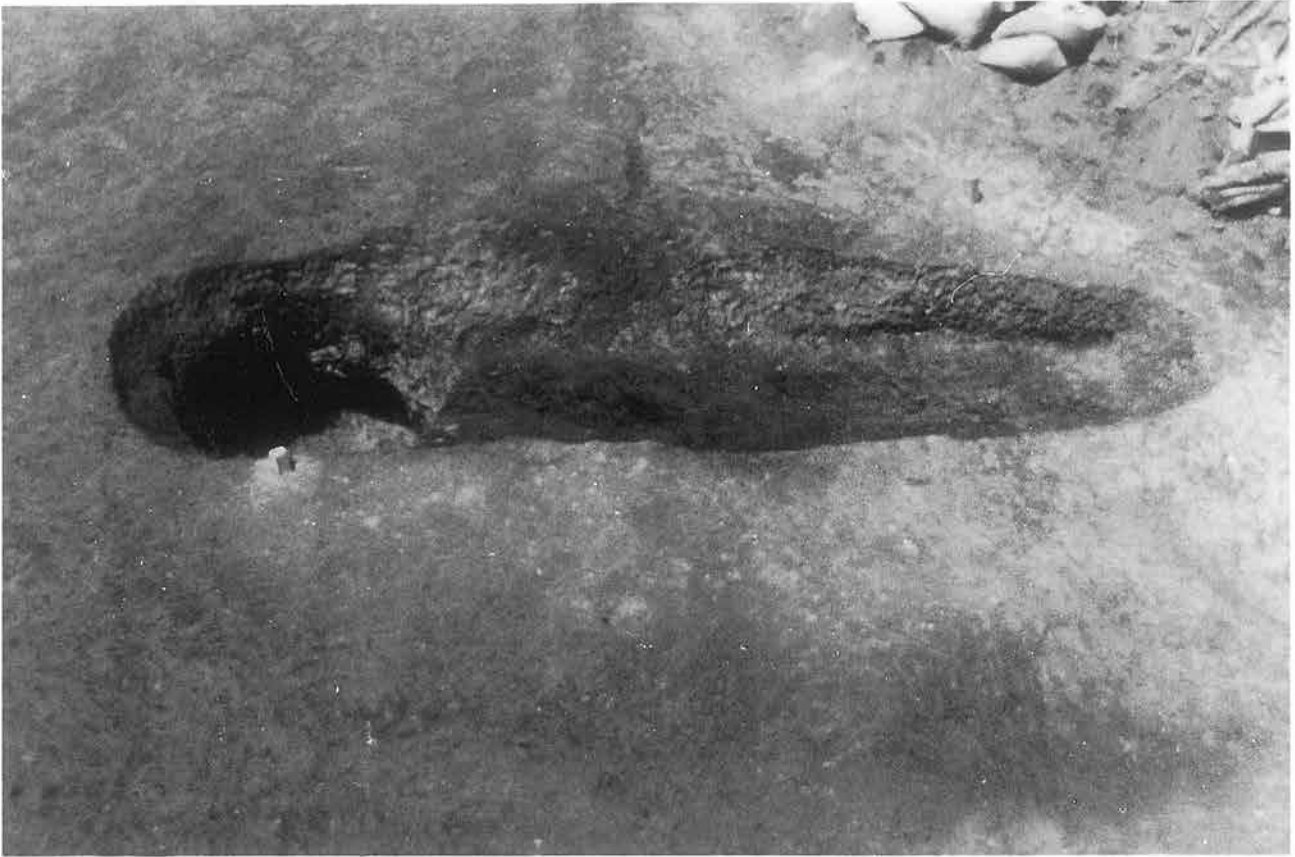


第1号炭窯跡土壤断面



第1号炭窯跡完掘状況

# 第10図版



第2号炭窯跡



調査作業風景



出土遺物（羽口）

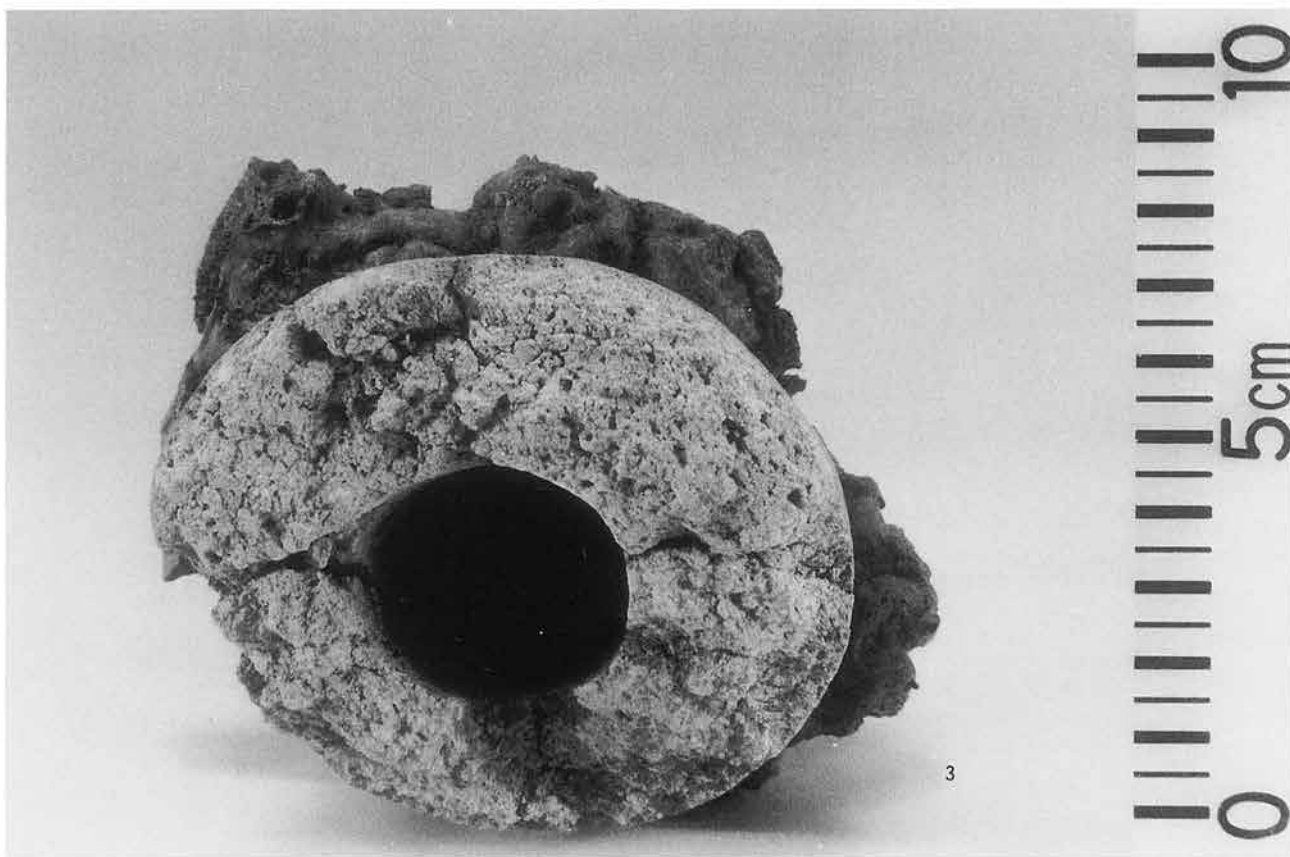


出土遺物（羽口断面）

# 第12図版



出土遺物（羽口）



出土遺物（羽口断面）



出土遺物（炉壁を噛んだ鉄滓）



出土遺物（鉄滓）

# 第14図版

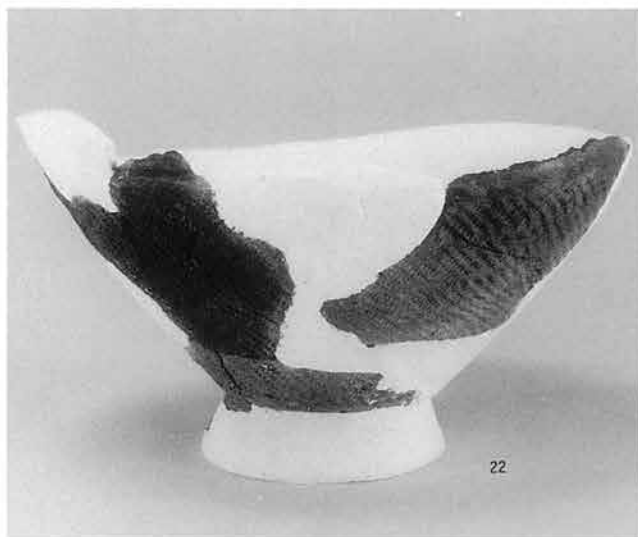
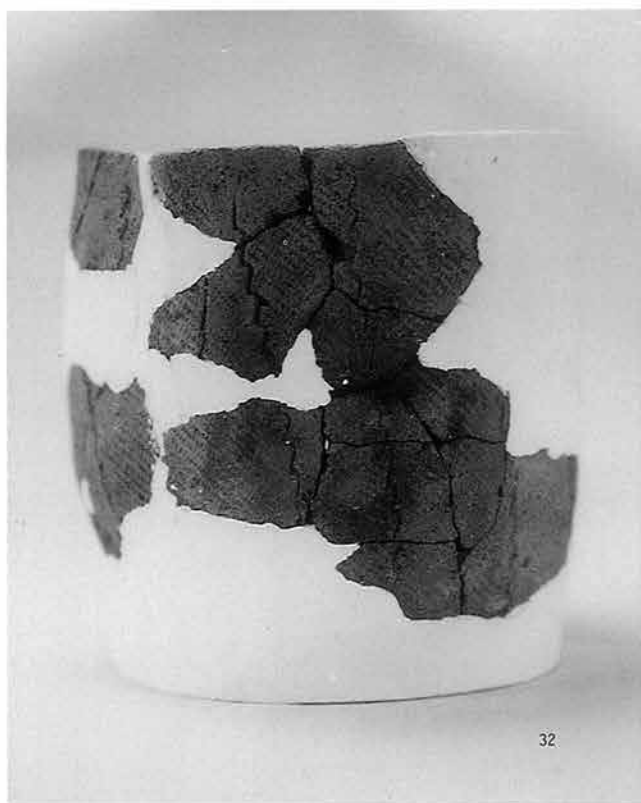


出土遺物 (羽口)

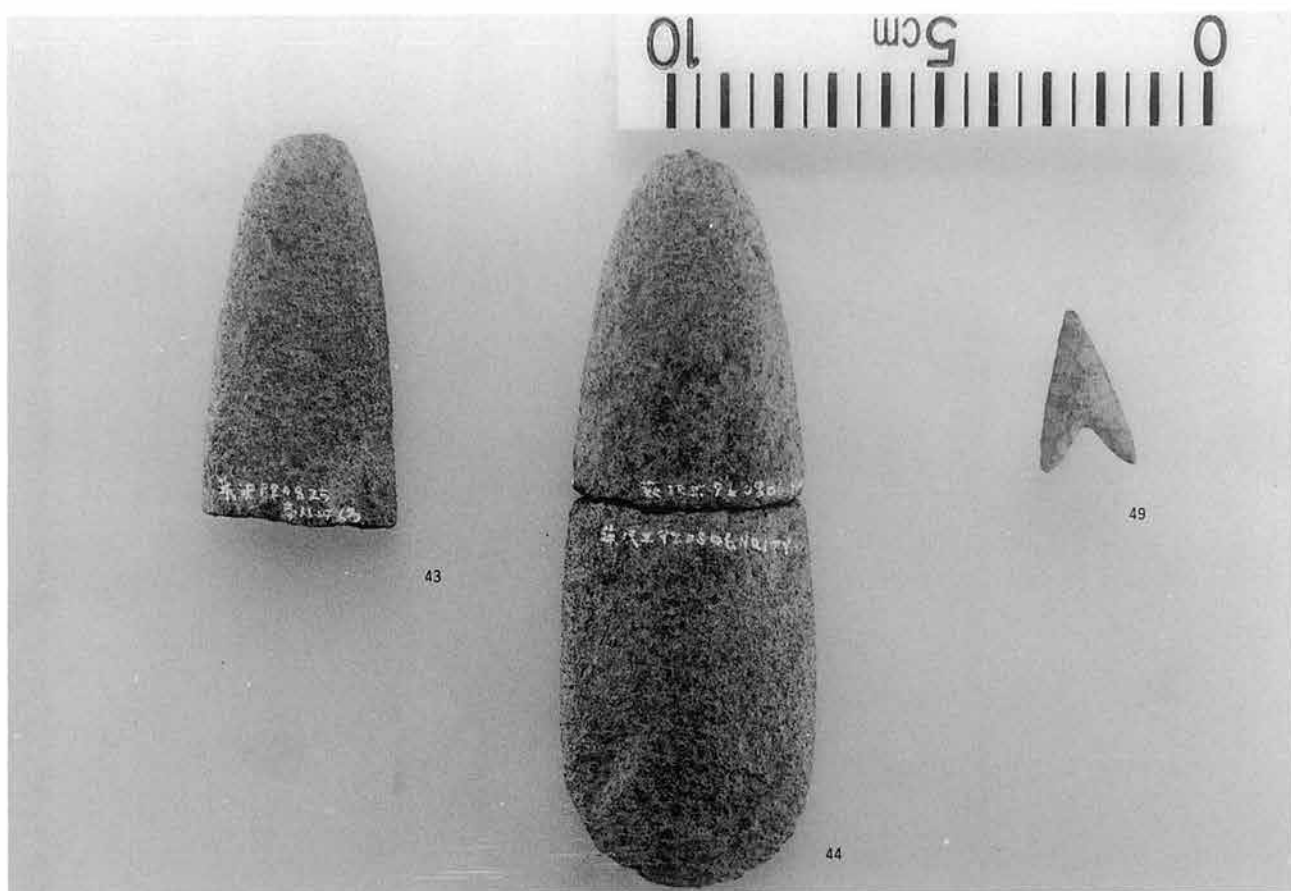


出土遺物 (羽口)





出土遺物（土器）



出土遺物（石器）



宮古市埋蔵文化財調査報告書38

# 萩沢II遺跡

—平成4年度発掘調査報告書—

1993.3

発 行 岩手県宮古市教育委員会  
宮古市新川町2番1号

印 刷 花坂印刷工業株式会社  
宮古市新川町1-2